

授 業 科 目 の 概 要

(人間発達学部子ども教育学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
ベー シッ ク ス キ ル	言葉と文章	この講義では、文章表現に必要な、音声の働きや仕組み、慣用句、類義語等の語句の意味や用法、文の成分の順序や文の組み立て方、単語の活用についての理解、助詞や助動詞などの働き等の重要な問題を選択して提示し、理解を深める。また、相手に自分の考えを正確に伝えるために、文章の形態に応じた文の構成や、根拠を明示した論理的な文章展開、説得力のある文章の書き方等を学習する。そして、文章表現への理解を深め、文章を書くことの楽しさや、面白さを体得させる。	
	情報処理論Ⅰ	われわれの生活に深く入り込み、身近な存在となったコンピュータの機能と可能性について理解を深めることを目的とする。具体的な内容としては、コンピュータのハードウェア・ソフトウェアの基礎知識、ネットワークの活用、情報処理技術の社会に及ぼす影響を中心に学習する。	
	情報処理論Ⅱ	パソコンの初歩的知識・技術を習得している者を対象とし、身のまわりに存在するデータを効率よく活用する技術や、データの分析・整理の技法、情報処理システム、システムの運用管理などの基礎的知識を習得することを中心に学習する。さらに、プログラミングの基礎的知識について理解することも目的の一つとする。	
	英語コミュニケーションA	英語の特質を理解させながら、基本的な文法事項がコミュニケーションの支えになることを学習し、日本語との違いに留意しながら、基礎的な文法運用能力を習得する。また、学習上重要となる問題点の発見能力、および問題解決に向けての実践力の育成を目指す。特に日本人英語学習者にとって習得が困難とされる文法事項を精選し、多角的な視点から分析し、習得する。	
	英語コミュニケーションB	英語を使用している人々及び日本人の生活や習慣、歴史、伝統文化、自然科学等の様々なジャンルの英文教材を用いることによって、多様なものの見方や考え方を知り、同時に英語運用能力と英文読解力を習得する。国際社会に生きる日本人としての国際協調の精神を養う。また、まとまった英文の読解を積み重ねることで、既習の文法知識の定着、語彙の補強、関連分野についての知識の充実と拡大を図る。複雑な構造を持つ英文を迅速かつ正確に理解し、言語表現を文脈の中で適切に解釈できる言語感覚の養成についても重視する。	
	英語A	本授業は、英語に関する教養を幅広く身につけ、コミュニケーション能力を向上させることを目的とする。この目的を達成するために、講義では映画化された英米の文学作品を素材として、生きた英文に触れつつ、個別の場面における英語の効果的な用いられ方から、作品の文化的・文学的意義までをも幅広く解説していく。さらに英語に関する教養に裏打ちされた表現力、作文力をも身につけさせる。	
	英語B	本授業では、英文読解力を培うために実際に英米の文学作品を原書で読んでいく。対象とするのは、特に有名な短篇小説数編(英米各2編程度)とする。それらを精読することによって、受講生に英文の高度な読解力ならびに文学作品の読み方を身につけると同時に、英米文学の諸相に触れることによって、英語コミュニケーション能力をいっそう高めることを目的とする。	

ベーシックスキル	統計学	データを収集し、それを分析し、そこから何らかの結論を得ようとするときに統計学は一つの重要な手法である。データの特徴を視覚的に捉えるのがグラフであるが、新聞や雑誌にもそのようなグラフが多用されている。ここでは、収集したデータの分析のためにグラフ（ヒストグラム）を作成し、そのグラフから情報を読み取り、データの傾向を分析する方法を学ぶことを目的とする。実際のデータにもとづいて、正規分布、t-分布、信頼区間、相関係数、推定と検定などを扱う。エクセルなどを用いて実習も取り入れた講義を行う。		
	スポーツと健康	スポーツは、健康を増進し、心身を調和的に発育、発達させるとともに、筋力や内臓諸機能を高め、体力の向上や生活能力を育成する。生涯にわたり、スポーツを生活の一部として位置付けるためには、運動やスポーツによる楽しさを経験し、自分の健康や体力に対する認識を深め、健康増進のためのトレーニング方法や運動処方を理解することが大切である。本授業では実技を通して、技能・体力の向上を目指すとともに、心身の自己管理能力や態度を養い、明るく豊かで生きがいのあるライフスタイルを身に付けさせることを目的とする。		
	保健講義	健康はウェルビーイングの基礎であり、基本的には睡眠、運動、食事という三つの習慣で支えられている。一日一日の日常の生活習慣がその人の現在と将来の健康状態につながっており、それは言い換えれば、自分の健康は、生活の管理によって自分自身で守るべきものであることを意味する。大学時代は、生涯にわたる健康づくりにとって、きわめて重要な時期であり、この時代に健康な身体、知的能力、精神そして正しい食習慣という四つの財産を身につけることの重要性を理解し、実践へとつなげる。		
	キャリアデザイン	大学での「学び」や進路選択を行ううえで、キャリアデザインの概念は極めて重要である。本講義では、キャリアデザインの基本的な考え方を理解するとともに、進路選択と職業、フリーター・ニート問題、キャリアとジェンダーの視点、社会が求める人材像、自己理解のために必要な理論と方法などについても学ぶ。これらの学びを通して、自分自身の将来のビジョンを描き、目的意識を持って充実した大学生活を送ることができるようになることを目指す。		
教養教育科目	環境とサイエンス	人間と自然の共生	様々な地球環境問題を解決し、持続可能な社会を形成するためには、自然からの「搾取」によって成し遂げた過去の経済発展から、自然との「共生」による持続可能な経済発展へと転換することが必要である。本講義では、「共生」をキーワードにして生態系に関する知識を学び、人間も生態系の一員であることを再認識する機会とする。	
		環境問題入門	人類社会と自然生態系とが共存する持続可能な社会構築に貢献できる、新たな思考力と行動力を備えた人材育成が求められている。特に環境問題を社会との関連において認識し、解決に向けた将来展望を持たせることは環境教育の重要な役割である。本講義では、環境問題と人類社会との関わりを中心として、人類文明や経済発展の歴史的経過、地球的規模の環境問題を再検証し、環境問題に関する基礎的事項について学習する。	
		生命科学	生物の基本となる生命科学の基礎を理解し、動物としてのヒトについて、生命の生体機能と特に食環境との関係を生理学的に捉え、ヒトの生命維持に必要とされる概念の理解を深める。現代の人々は、水、空気、食物と一緒に、食品添加物、農薬、環境汚染物質をさらに医薬品としても、さまざまな化学物質を体内に取り入れている。ヒトの健康維持にもっとも重要な基盤となっているのが食生活であり、食生活における栄養素や生理活性物質がヒトの生命の生体機能の維持にどのように関わっているかを科学的に解析する。	
		化学の世界	化学は物質を原子や分子の集合として扱う学問であり、その性質上、社会とのつながりが密接である。化学の発達は人類に物質的豊かさをもたらした快適な日常生活を可能にしたが、その一方で人工的に合成された化学物質の地球環境への影響が深刻な社会問題として認識されるようになった。本講義では、われわれの日常生活を成り立たせている化学物質の性質を理解するために必要な化学の基礎を、特に物質の構造と物質の反応を中心にして学習する。	

環境とサイエンス	物理の世界	<p>私たちは日常生活のなかで様々な物理現象に出会い、その不思議さに感動したり、その原因や因果関係に思いをめぐらせることがある。この講義は、そのような身近な物理現象を題材にして、その現象の仕組みやそれを成り立たせている法則について学習することにより、物理学の基礎的知識を習得することを目的にしている。具体的には、身の回りにある物体の運動や摩擦力、弾性力などに関する力学を中心に講義する。</p>	
	生物の世界	<p>最近の生物学の発展はめざましく、我々の生活にも重大な影響をもたらすような重要な発見が次々になされている。それゆえ、そのような発見によってもたらされる生物学の新しい知識や技術について正確に理解することは、我々が現代社会に生きていく上においても重要なことと考えられる。本講義では、そのような生物学の現状を理解するために必要とされる基礎を、「生命の営み」と「生物の生活」を2本の柱とし、それを生物の進化との関係において幅広く学習する。</p>	
	地学の世界	<p>地球科学（地学）は、地球を研究対象としその内容は多岐に及んでいる。近年、地球や宇宙に関する知見は著しく増大し、地球観も日進月歩で変貌しつつある。地学の世界では、主に地質学の立場から、固体地球を理解する上で必要な基礎的事項と現在の知見の概要を幅広く学習する。</p>	
	都城の文化と歴史	<p>都城地域の歴史や文化について学習することを通して、都城地域についての理解を深めるとともに、4年間の学生生活やさまざまな学習活動を展開していく際の基礎的な素養を培う講義として位置づける。授業は、6人の教員によるオムニバス形式で行う。担当教員別に15回の講義内容を示すと以下の通りである。</p> <p>（3赤松國吉／2回）</p> <p>第一回目の授業で、地域の文化と歴史を学ぶことの意義、都城地域の概略的な特色について講義し、本授業科目の授業計画と講師紹介、成績評価の方法について指示する（第1回）。最終回の授業で、レポートの書き方及び提出方法などについて指示を行う（第15回）。</p> <p>（徳永孝一／3回）</p> <p>霧島盆地の生成発展を歴史的に捉えるため以下の3点について講義を行う。①古代・中世—南九州は広大な荘園（島津荘）の地である。その開発やなりゆきについて講義する（第2回）。②明治初期—辣腕県令三島通庸の都城盆地の地域発展への貢献などについて講義する（第13回）。③大正初期—不況から脱出するため開田と鉄道敷設事業が導入されたが、その推進者有吉忠（知事）の活躍などについて全国的な動向と関連させて講義する（第14回）。</p> <p>（山下真一／3回）</p> <p>都城の歴史を振り返ると、近世の藩の枠組み、さらに宮崎県や鹿児島県といった現代の行政的枠組みにおさまらない独特の歴史をもっている。これには、都城が島津家と関係が深いことが影響している。そこで、本講義では、都城の歴史の特長について、都城島津氏の歴史との関連で解説する。なお、都城島津家史料の中から主なものについて写真等で紹介し、その内容についても解説しながら進めていく（第3・4・5回）。</p> <p>（立元久夫／3回）</p> <p>都城地方の一般民衆の生き方を通して、人々の祈りや習俗を学習する。具体的には、①都城地方の年中行事、人生儀礼、信仰、民俗知識、口頭伝承等、②都城地方の民話・方言等、③大淀川流域の自然及び地方史の教材化について講義する（第6・7・8回）。</p> <p>（佐々木綱洋／2回）</p> <p>近世の都城における渡来人の生活と文化について学習する。具体的には、①内之浦と都城唐人町とのつながり、②都城唐人町の移転と中町唐人町の形成、③中町唐人町天水家の媽祖像、中国象棋駒、湖州鏡などの中国渡来品について講義する（第9・10回）。</p> <p>（富迫美幸／2回）</p> <p>都城の美術史を、日本や西洋の美術史ともからめて概観する。「美術」という言葉が生まれたのは明治初期であるが、それ以前の藩政時代・島津家の「絵師」の時代から、明治の巨匠・山内多門、さらにその次の世代までを取り上げて講義する。また、江戸末期から流入してくる洋画の都城における受容についても触れていく（第11・12回）。</p>	オムニバス方式
教養教育科目	人間の歴史と思想		

教養教育科目 人間の歴史と思想	民俗学	民俗学は、神話・民話・伝説・伝承・風俗・習慣などの無形文化、生活用具・生産用具・まつり・儀式・芸能などの有形文化といった民間の伝承の中、古代から今日へと継承された基層文化を明らかにする。「日本神話」の大きな柱となる「日向神話」の意味・意義や、南九州に特徴的に残された神楽・まつり・行事などを通して、有形・無形に現代の私たちに刻み込まれた精神・物質生活などの自覚的な認識へと進む。また、文化人類学（民族学）の役割にも触れる。	
	宗教学	宗教と日本人について考える。このテーマに基づき、初歩的なプレゼンテーションのやり方を学びながら、学生自身による具体的で身近な事例、例えば、地域社会と仏教の関わり、都城地域における寺院や神社の役割等についての発表や、歴史的事例、例えば、仏教が歴史的に、日本文化にどのような影響を与えてきたかについての発表、それについての全員での質疑応答によって、宗教、特に仏教と日本人の関わりについて学習する。	
	考古学	考古学は、「大地に刻まれた歴史」である遺跡（遺構・遺物）を手がかりとして人間の歴史を読み解き、浮き彫りにする。基本的な方法論である層位・形式（型式）・様式・編年・分布などの資料の基礎操作を通して、列島弧の中でも他の地域には見られない特徴ある文化を形成した地域（南九州）の歴史を明らかにしていく。また、有形の痕跡から、人間の営みの無形な部分への確かな洞察力を養い、国家史の枠組みからだけではなく、人間存在と地域史の側から全体史を見通す視点を形成する。	
	倫理学	都城島津家の藩校に始まり、現在の明道小学校に継承されている教育理念でもある『人倫、礼儀、躬行』という倫理観を出発点とし、倫理思想の成立過程とその時代背景について検討する。さらに、入門編にふさわしい倫理思想を取り上げ、倫理学の基本的な考え方、基本用語についてわかりやすく解説していく。その過程で、人間と倫理、道徳との関わりを考察する。また、現代にまで影響を与え続けているいくつかの重要な倫理思想を取り上げ、それぞれの思想の成立過程と内容を示しながら、現代社会とこれらの思想との関係を考える。	
	歴史と社会	歴史学を学ぶということはどういうことか、歴史は何のために、何をどのように認識すればよいのかを視点に、歴史的事実と歴史資料の関係や歴史学と自然科学、歴史学と常識等について考察し、歴史学の本質を学ぶ。この講義では、歴史を一人ひとりがどのように認識すればよいのかを考える。	
	伝承文学と民話	文学は「言語表現による芸術作品」である。ということから思い浮かぶのは、詩歌・小説・戯曲・随筆・評論などの文字表記による作品群である。しかし日本文学史には、脈々と口伝での音声言語表現「民話（民間説話）」と呼ばれる昔話・伝説・世間話等が対極にあった。音声表現としての民話のみならず、絵本・紙芝居として作品化された民話も検討素材とし、民話が私たちにどういった存在であったかを考察する。	
	哲学	まず、入門編として『哲学とは何か』という問いを出発点に、哲学発祥の地（インドとギリシャ）と古代文明の関わりや哲学者達の思想とその時代背景について説明していく。入門編にふさわしく、理解しやすい哲学思想を取り上げ、哲学の基本的な考え方、基本用語についてわかりやすく解説していく。次に、インドやギリシャにおける哲学史上の代表的な哲学者を取り上げ、その思想と時代背景について検討し、哲学者とその思想の本質について考える。	
	数学と文化	数学は現代の科学技術の発達を根底において支えている理論であり、それについての認識を深めることは現代社会に生きるわれわれにとって重要なことと考える。この講義では、数学とはどのような学問であるのかを、ユークリッドの「原論」から始まり、それが人間の文明の中に生き、文化をつちかう上で重要な役割を果たしてきたことを、数学と科学、宗教、文学、美学との関係にも言及しながら解説する。	

教養教育科目	現代社会と人間	現代人のこころ	社会的変動の激しい 21 世紀において、こころの働きを理解することの重要性は、より高まってきているといえる。家族のあり方、教育の社会的役割、仕事の選択と働きがいなど、これまで社会を維持してきた多くの制度や価値観が変化してきており、われわれはその変化に対応して、われわれのこころのあり方を変えていくことを求められているといえる。本講義では、人間のもつ心の働きの「強み」に焦点をあてて、さまざまな社会現象の中でこのこころのあり方を考えていく。	
		社会学	社会学は人々が社会関係を取り結んでいる限り、どんな現象でも対象にする。理論や方法については百花繚乱、やや乱立状態である。しかし社会学が「学」である以上、その古典から最新の研究まで共通する社会の見方、考え方は確かに存在する。この講義では代表的な社会学者の「作品」や基礎的概念を通じて、社会の見方、考え方を学ぶ。	
		法学	法と道徳・法と正義・法と国家などの法的概念の理解に向けて学習するとともに、国の基本法である憲法や市民の権利・義務に関する民法、さらにはその他の諸法を考察することによって、基本的な法体系の理解や法的思考能力を身に付けることを目的とする。本講義では、法と社会という視点から、憲法で定めている三権分立などの統治機構や民法で定める契約と法律行為、さらには刑法上の違法性と責任などについて、さまざまな社会的事例を通して概説する。	
		経済学	現代社会の複雑多岐に亘る経済現象を理解するためには、まずその基礎理論の体系的な学習から始めねばならない。本講義では近代経済学の視点に立って、その体系的な理論の学習・修得を目的とし、様々な経済事象について説明を行なう。国民経済全体の動き、経済成長モデル、景気変動論等を取扱う。	
		国際関係論	1999 年代以来、国際的に、人、物、金、情報の移動速度が急激に増大している。このような、グローバリゼーションによって、国際関係のいくつかの課題が生じている。環境問題、安全保障問題資源の問題、地域協力の問題等が解決すべき、国際的な課題である。本講義では、これらの問題を注意深く観察し、分析し、これからの展望を見だし、21 世紀に向けた新たな解決策について考える。この過程で、国際関係についての基本的な知識や国際人として生き抜く力を身につけさせる。	
		時事問題研究	日常的に報道される様々なニュースの中から、地域社会における政治的、社会的、文化的な問題を抽出し、それらのニュース情報にどのような問題点が隠されているかを考える。地域の時事問題についての基本的な理解と、それらが起こってくる、地域社会の問題点について考察する。	
		日本国憲法	国の最高法規である憲法の重要性を認識し、旧憲法と対比しながら日本国憲法の国民主権、平和主義、基本的人権の尊重という基本原則について考察する。講義では興味のある判例を用いて、憲法の規定がどのように解釈され運用されているかを知り、憲法の基本的理解に努める。	
		メディア論	宗教や教育、政治などの色々な地域社会の事象をメディア論的な事象の把握方法を踏まえながら、分析する。またこれらの議論の合間に、欧米におけるメディア論の古典とされるマクルーハンや、日本におけるメディア論の古典の一つである中井正一の議論を織り交ぜる。さらに、メディアの特徴や功罪の理解を通じて、単に情報機器の操作能力というものに留まらず、メディアを批判し、メディアからの不必要な影響を避け、かつメディアを利用していく力、すなわちメディアリテラシーを身につける。	
専門教育科目	入門	人間発達概論 (概要) 人間発達学部は、道徳心を持ち豊かな「人間力」と「実践力」のある人間の育成をめざし、人間発達についての多面的、総合的な研究教育を行う。本講義は、その入門として位置づけられるものであり、人間とはどのような存在であるのか、生涯にわたっていかに発達していくのかといった根本的な問題について学生が考えていくための基礎的知見を提供する。3 人の教員がオムニバス形式で進めるこの授業では、人間の生涯にわたる発達を、倫理学・思想、生理学・心理学、教育学・発達論などの多面的な観点からとらえ、展望していく。	オムニバス方式	

専門 教育 科目	入門	人間発達概論	<p>(オムニバス方式／全15回) (長友泰潤／5回)</p> <p>人間とはどうあらねばならないのかという問いに始まるギリシャの哲人ソクラテスの人間学は、理性を根底に置き、人間は生まれてから死ぬまでの生涯を、絶対的な善なるものは何かについて吟味しながら生きるべきであるとする。また、仁愛を思想の根底に置く孔子の教えでは、「人を愛すること」を最も重要な徳と捉え、人間学の基本に据えている。さらに仏教思想やキリスト教思想にも普遍性をもつ人間観を見いだすことができる。これらの宗教や哲学思想に見られる人生観、死生観、そして、師と弟子の関係にも言及することによって、生涯にわたる人間の発達という視点を加味して、人間存在を問い直し、生きる力の根源とは何か、人間はその生涯をどう生きるべきかについて話題を展開していく。</p> <p>(5 島井哲志／5回)</p> <p>心理学は初めて人間の発達を科学的に捉えようとした学問である。人間は遺伝などの生まれ持った要因と家庭や教育などの環境要因との相互作用のもとで成長し、発達する。しかし、人間は影響を受けるだけの存在ではなく、潜在的に他者と関わる力を持って生まれ、他者や社会との関わりを通して、社会的存在である人間として成長する。ここでは、心理学が発達をどのような視点から捉えようとしてきたかについて論じ、人間の発達における他者の関わり的重要性を理解し、発達の視点から子どもの成長を支えることの必要性について考える。</p> <p>(7 澁澤透／5回)</p> <p>教育において人間発達を考えると、人間が発達するとはどういうことか、発達の原動力はなにか、発達を促す働きかけはどうあるべきかといったことが問われる。この問いは、個人の発達という側面だけではなく人類の発達という側面を含む問いであり、このことについて考えていくためには、人間発達に関する思想や理論について検討していくことと日常的な教育実践のなかに見られる発達の事実を確認し考察していくことが求められる。講義では、まず近代における発達の人間観の生成と展開について概説し、つぎに戦後日本の教育と教育学における発達観および発達と教育の関係をめぐる議論を整理して紹介する。最後に現代日本における子どもの発達をめぐる諸問題について考察し、教育の課題についても触れていく。</p>	オムニバス方式
		子どもと現代社会	<p>(概要)</p> <p>子ども教育学科では、子どもの発達と教育をめぐる諸問題について多面的に検討し、解決の道を探る教育研究を行う。本授業は、その入門的な講義であり、現代社会の諸相に照らして教育の問題を考察するとともに学生の問題意識を喚起して、今後の4年間の学びにつないでいくことをねらいとする。授業は、3人の教員によるオムニバス形式で行う。まず教育学の観点から子どもの学力をめぐる問題について、次に教育心理学の観点から子どもの「こころ」や仲間関係をめぐる問題について、最後に教育社会学の観点から地域社会と教育の関係について、いずれも社会のあり方と関連づけながら考察していく。最後に授業のまとめと検討すべき課題の整理を行う。</p> <p>(オムニバス方式／全15回) (1 黒木哲徳／5回)</p> <p>21世紀は知識基盤社会になるといわれている。いったい、知識基盤社会とはどのような社会なのか、その時代を生きるにはどのような力が必要なのかということについて、新学習指導要領並びに学力調査の観点から考えてみる。また、PISA調査と学習の転換についても触れ、現代社会の変化に対応して子どもをめぐる教育はどうあるべきなのかについて考察検討する。</p>	オムニバス方式

専門教育科目	入門	子どもと現代社会	<p>(14 磯部美良／5回) 教育心理学の観点から、現代の子ども達をめぐる問題について論じる。本講義では、とくに、いじめ、不登校、非行、引きこもりといった仲間関係やコミュニケーション能力に関わる問題を取り上げる。そして、さまざまな統計データや事例を提示して、現状への認識を深めるとともに、これらの問題に対する理解を促し、解決策について検討していく。</p> <p>(2 神田嘉延／5回) 学校崩壊など、これまでの常識では考えられない状況が学校現場で現れているが、目先の対処療法だけでなく、人類史の視野から子どもの教育を見つめることがなければ問題の根本的解決は見出せない。このような広い視野から問題をとらえようとする際、へき地等での少人数教育や自然環境の中での育ちに着目することは、都市の学校を含めた現代教育を再生していく上でさまざまな示唆を与えてくれるものと考えられる。現代社会の教育問題を克服していく展望を見出すための糸口として、ここでは、へき地や農村での教育、山村留学等を取りあげ、現代社会における子どもの育ちの在り方について検討していく。</p>	
		教育原理	<p>「教育とは何か」という問いは、自らの被教育体験の意識化と今日の教育問題の認識から始まる。講義では、この出発点に繰り返し立ち戻りながら、人間・社会・教育について原理的・歴史的に考察する。まず「人間性と教育」という柱を立て、人間の存在的特性・発達の特性を踏まえて教育の在り方を考察する。次に「歴史のなかの教育」という柱を立て、教育の歴史をたどることにより向かうべき方向について考察する。最後に「現代社会と教育」という柱を立て、今日の教育問題について構造的に把握することを目指す。なお本講義は、幼稚園を含む初等教育を主たる対象とした内容とする。</p>	
専門教育科目	専門基礎科目	教育と社会	<p>急激な社会変化の中で、日本の教育はさまざまな問題を抱えている。この現実の問題を直視しながら、その問題の克服を実践的に探るために、社会的、制度的、経営的視点から教育論を展開する。本講義では、社会構造と教育に関する理論を紹介し、教育基本法、学校教育法、社会教育法、地方教育行政の組織運営に関する法律、ユネスコの教員の地位に関する勧告、児童の権利に関する条約などから教育制度のしくみを教授する。さらに、具体的な学校経営や学級経営の方法について、学生と共に考えていく講義にしたい。講義の目的は、教育実践していくうえで、社会的、制度的および学校経営の基礎的知識を学生自身が主体的に理解することをめざす。</p>	
		教育心理学	<p>教育心理学の基本的な概念や理論の講義を通じて、保育や教育現場における指導や援助の実践に役立つ視点を習得させることを目的とする。具体的には、学習と記憶のメカニズム、動機づけ、学習方略とメタ認知、社会性や道徳性の発達、発達障害等について取り上げる。これら教育心理学の知見を学ぶことにより、保育や教育現場において生じるさまざまな問題に対し、その背景を正しく把握する力や、有効な対処法を見つけ出す力を身につけていく。</p>	
		保育原理Ⅰ	<p>保育の基本的な仕組みについて講義する。まず、保育とは何か、保育はどのような営みとして成り立っているのかという本質的な問いから始めて、保育の意義、保育の場、保育の歴史・思想・制度など保育にかかわる基本的な事項について述べる。次に、発達の過程や保育の内容、環境、方法、形態など保育の実践的展開にかかわる問題を取り上げる。これらをとおして、保育者として身につけておくべき保育の基本の習得とともに、子ども観・保育観の確立・深化を目指す。</p>	
		保育原理Ⅱ	<p>本講義は、前半は保育課程・教育課程を中心に取り上げる。「保育所保育指針」「幼稚園教育要領」にもとづき、保育の計画作成上の留意点を踏まえ、発達過程に応じた保育の指導計画が作成できるように指導する。また小学校との連携や保育者などの自己評価の問題にも言及する。後半は保育者の専門性、多様な保育ニーズへの対応、家庭・地域との連携、子育てに関する相談援助活動など、保育をめぐる現代的諸課題を取り上げる。これらをとおして、見通しをもった保育を実践する力を養うとともに保育者・保育施設が果たすべき今日的役割と使命は何かについて理解を深めることを目指す。</p>	
		子どもと教育の歴史	<p>現代の子どもや教育をめぐる様々な問題を考える上で、その手がかりを歴史に求めることは、一つの有効な手法と言える。本講義では、人間と教育についての歴史や諸思想を、現代の状況との関連において学ぶことに主眼をおき、「教育の現在」を歴史的見通しにおいて把握することができることを目指す。教育の展開をたどりながら、時代によって異なる子ども観や教育観の歴史的由来や、各時代における教育に関わる多様な実践の試みについて、個々の事例を通して考察する。</p>	

専門教育科目	子どもの心身	発達心理学Ⅰ	生涯発達という視座から、新生児から成人後期に至るライフステージにおける、知性・感情・対人関係・社会性などの発達を、自分の置かれている青年期の理解も含めて、生物学的な成熟、本人の志向性、社会的交流との関わり合いの中で紹介していく。乳幼児期・児童期の発達の理解を促し、それぞれの時期の発達上の特徴やその障害について取り上げる。そこから、自己と社会性に関わる問題や障害への理解を目指す。	
		発達心理学Ⅱ	乳幼児期から児童期の子どもの発達の諸相を心理学的な観点から講義する。本講義では、とくに、子どもの知的発達、言語や認識の発達、情動の発達、および対人関係（親子関係や仲間関係）の特徴について検討する。また、正常な発達に加え、不適応的な発達の諸相についても学ぶ。さらに、子どもに関する現代的な諸問題（虐待や発達障害）についても取り上げ、それらに対する問題意識を高めると同時に、対応のあり方についても検討する。	
		小児栄養	子どもたちが将来にわたって健全な社会生活を営むためには、この時期の食生活が果たす役割は大きい。そこで、小児期における心身の発育・発達過程を理解するとともに、それぞれの時期における特性に対応した栄養学的な知識を習得し、離乳期からの適切な食事支援の方法などを実践的に学ぶ。さらに、時代的背景を踏まえて、子どもたちの食生活における問題点を取り上げ、栄養状態を評価する方法や食生活の重要性を知るとともに食育の重要性について理解を深める。	
		子どもと食育	昨今の「食」をめぐる環境の変化の中で、「食育は健全な心と身体を養い豊かな人間性を育てていく基礎になるもの」と位置づけた食育基本法が制定された。国民の「食」に関する考え方を育て、健全な食生活を実現するために食育をどのように推進していったらよいかを多方面からの観点で学習する。家庭のあり方、あるいは保育所や児童福祉施設、職場、地域での食育のあり方、また、その連携について解説する。さらに、子どもの食について取り上げ、実践的な演習を含む。	
		食物アレルギー論	本講義では、まず食物を起因とするアレルギーについて基礎的なことを学び、食物アレルギーが起こるメカニズムについて理解を深める。また、食物アレルギーの原因成分である特定のたんぱく質の性質、特に、日本人にかかせない食品であると同時にアレルギーの原因となりやすい卵、乳製品、小麦、米や果実などに含まれる特定の原因たんぱく質の性質について詳しく学ぶ。さらに、アレルギー反応を抑制する抗アレルギー成分や、近年、バイオテクノロジーを駆使して開発されている低アレルゲン化食品についての知識を得る。	
		小児保健Ⅰ	生命の維持と情緒の安定を目指す保育における小児の健康の意義を理解し、小児を対象とした保健実践における保健活動の重要性の理解を目指す。出生数の減少や女性の社会進出などによって、子どもが置かれる家庭状況は変化している。また、栄養や体格が向上した一方で、きょうだい数の減少や、仲間や遊びの場の減少、さらには子育てに不慣れな親の増加などの問題が生じている。現在のさまざまな小児の健康問題は、こうした養育環境や養育方法の変化に対応しているところが大きいことを認識し、その問題を適切に処理する能力を養成する。	
		小児保健Ⅱ	医療の進歩によって、子どもの死亡率は著しく低下し、疾病は軽症化してきた。このことにより、入院治療よりも外来診療が重視され、予防接種や健康診断の意義が増大している。ここでは、子どもの心身の健康について、小児科学および小児保健学の立場から、科学的に紹介する。また、小児の疾病や事故の特徴と、その予防について理解し、緊急時の基礎的対応を可能にする。最新の保健医療の知識をもとに、乳児期から児童期までの疾病への理解を深め、家庭や地域との連携を通じた保健活動の重要性の理解を促す。	

専門 教育 科目	子ども の 心 身	小児保健実習	小児保健Ⅰ、Ⅱで学んだ知識を基礎にして、保育の場において小児の健全な成長発達を支えることのできる適切な保育能力を習得する。身体発育の測定方法と評価、異常や疾病の早期発見、急病、小児に特有な事故の予防と応急処置、包帯法、蘇生法（人工呼吸法・心臓マッサージ法）、集団保育における健康管理等が的確に実践できる知識、観察力、および技術を身につける。	
		乳児保育	保育所における乳児保育の意義と本質を理解し、乳児保育の内容と保育方法を指導する。胎児期や乳児期の育ちの道筋とその特徴を理解し、乳児への認識を深め、その発達段階にふさわしい対応とは、どのようなものかを考える。保育所での実習に向けて、「保育所保育指針」における乳児保育の実際も理解するよう指導していく。	
		精神保健	本講義では、小児の精神発達の様相や、虐待やいじめなどの心の健康に関する問題について学び、適切な保育のあり方について理解することを目標とする。また小児の各発達時期における健全な心の発達や、小児の心の問題とその背景（家庭・教育・文化・社会など）、そして家庭・地域・医療・保育の連携の必要性について理解し、健全な心の発達を促す保育のあり方について理解する。	
		養護原理	本講義は、現行福祉制度における類型別施設養護の意義とその処遇展開についての基礎的知識を習得する。とくに地域における施設の専門的役割についても講義対象とする。また、施設における日常生活援助、施設保育士の専門性、特別な配慮を必要とする児童への援助や保護者への援助について学び、さらに日常的なケア、リビングケア、アフターケア、児童の権利保障および自立支援計画などについて講義する。	
		養護内容	本授業では、児童福祉施設で生活している児童の日常生活や職員の援助の実際を理解し、「児童の最善の利益」を保障・実現するために必要な知識・技術の習得を目指す。現代社会における児童養護問題の発生要因を理解し、家庭における養護に欠ける児童の実態や地域における児童・家族問題を把握し、養護の専門的な知識と技術を習得する。	
		障害児保育	前半では、各種障害に関する基礎知識を踏まえた上で、障害のある子どもの理解と発達を援助する保育のあり方について、主に保育の実践記録の分析を通して考察する。また実践を支える障害児保育の制度と歴史についても取り上げる。後半は、障害児と保育の計画及び個別支援計画、健常児の障害児理解、家族への支援、障害児保育と地域の連携・地域発達支援ネットワークづくり、就学と特別支援教育など今日的な諸課題を取り上げ検討する。これにより、障害児保育に必要な知識を習得し、保育者としての資質を向上させることを目指す。	
		障害児心理学	障害のある子どもたちの心理・言語・行動・社会性の特徴を学び、ともに社会を生きる一員としての理解を深めるとともに、対応の在り方について考えていく。障害の中でも、ここでは知的障害、自閉症、学習障害、多動性障害などの発達障害を中心として、その概念や医学的な診断基準などを学び、それらの具体的な評価の方法や、子どもたちや保護者への指導・教育・支援の実際について学ぶ。	
		臨床心理学	臨床心理学とは、人間の心理的適応や健康、発達について研究し、それらの問題や悩みを持つ人への援助方法、心理的健康を促進する方法を探究する、実践的な学問といえる。本講義では、臨床心理学がどのような学問かを理解し、援助の対象となる人について学ぶことを目的とする。さらに臨床心理学の実践の場や、援助方法について、具体例を交えながら概説する。	
		親子関係論	本講義では、生涯発達の視点をもとに、新生児から老年期までの、変化していく様々な親子関係について、「親」からみた親子関係、「子」からみた親子関係、そして両者の「関係」という視点から論考する。親子関係の中で、人は様々な体験をし、成長していくが、本講義では、親子関係やその変化だけでなく、親子関係における諸問題や、親子関係の変化に伴う危機、またそれらへの援助についても、臨床心理学的視点を交えて学んでいく。	

専門 教育 科目	子 ど も の 心 身	幼児理解	本講義では、幼児期の子どもについて、さまざまな角度から考察を加え、理解を深める。具体的には、保育や教育現場で生じるさまざまな事例（たとえば、一年を通した園での行事、仲間関係、遊び、保護者への対応など）の検討を行う。このことを通じて、問題状況に対し、子どもの内面を理解しながら対応できる感性と知識、実践的指導力を養うことを目的とする。	
		教育相談	児童は、日々生活し、成長していく中で、様々な問題を抱える場合がある。これらの問題の解決は簡単ではなく、教師は多くの専門的知識を持つことや、具体的な解決策や予防方法を知っておくことが必要である。また知識を身につけるだけでは十分でなく、児童や保護者と信頼関係を築き、より良い教育相談を行っていくために、教師には、個々の児童、そして保護者に対して、真摯に向き合う姿勢が求められる。そこでこの授業では、教育相談に必要な専門的知識と、求められる態度について、講義やワークを通して、臨床心理学的視点から学んでいく。	
		ライフスキル教育	生涯にわたるウェルビーイングと幸福とを支え、人生におけるさまざまな困難への対応を可能にする能力であるライフスキルの基礎づくりは、幼児教育・学校教育における課題のひとつである。ここでは、WHOにおけるライフスキルの中心となる、①意思決定、②問題解決、③創造的思考、④批判的思考、⑤感情への対処、⑥ストレスマネジメント、⑦対人関係、⑧自己主張、⑨共感性、⑩効果的コミュニケーションを中心として、受講生自身のライフスキルの向上をはかるとともに、幼児および児童の基礎的なライフスキルを指導し形成するために具体的な方法論を習得することを目指す。	
		コミュニケーション教育	ライフスキルのひとつでもあるコミュニケーションスキルは、自己概念の形成と人間関係の充実や社会性の獲得が発達課題である幼児期から児童期において特に重要である。ここでは、円滑な人間関係の基本となる、自尊心に基づく自己表現を基礎として、コミュニケーションのためのスキルの原理を理解し、そのスキルを演習形式で習得することをめざす。受講者自身のコミュニケーションスキルの向上をはかると同時に、幼児期から児童期への発達段階に応じたコミュニケーションスキルを指導するための知識と技術を学ぶ。	
子 ど も と 地 域	子どもと地域	子どもと地域との関わりの希薄化が言われるようになって久しい。子どもの発達にとって地域はいかなる意味を持つのか、地域はどのように子どもの発達を支援すべきか、改めて問われている。本講義では、まず戦後における地域社会の変貌と「教育と地域」をめぐる議論について整理し、つぎに子どもが地域のなかで成長している事例を具体的に検討し、最後に子どもの発達を促す地域のあり方、子どもの地域参加のあり方について考察する。		
	子ども支援地域活動Ⅰ	「子ども支援地域活動Ⅰ」では、まずボランティア活動等の地域を支える活動の意義、その歴史と展開、現行のさまざまな活動の内容とその実態について理解するための導入指導を行う。その後、実際に「放課後子ども教室」「放課後児童クラブ」「サマースクール」等の子どもを支える地域の活動に参加することを通じて、子どもの育ちに地域が果たす役割を実践的に理解し、それを支える活動の意味を把握することを目的とする。講義で学んだことを単なる知識として終わらせるのではなく、実践的な力へと発展させていくことをねらいとする。		
	子ども支援地域活動Ⅱ	「子ども支援地域活動Ⅰ」と同じ趣旨で開設されるもので、2年次以降についても地域活動を継続する学生を対象とした科目である。ただし、これらの学生については下級生を指導するリーダーとして参加することにより単位を認める。なお、「子ども支援地域活動Ⅰ」の先修を履修要件とし、複数回の受講も可能とすることで、学生自らが活動を企画・立案していけるような資質を育成し、子どもを支える地域活動の体験を深めていく。		

専門 教育 科目	子 ど も と 地 域	子どもと手作り遊び	この授業では、子どもの玩具や遊びの文化の今と昔について学ぶとともに、実際に手作り玩具を制作する。例えば、昔から各地域で伝承されてきた木、竹、つる等の自然の材料を使った玩具や、家庭にある身近で簡単なりサイクル素材（牛乳や卵のパック等）を使った玩具の制作を行う。このことを通じて、物を手作りすることの面白さや楽しさを自ら体験し、その技術や道具に関する知識を身につけて、「玩具」と「遊び」を創り出せるようになることを目的とする。	
		子どもと民話	民話（民間説話）はかつて家庭内伝承としておじいさんおばあさんから孫へ、お母さんお父さんから子へと語り継がれてきた。語り手は、聴き手の目・表情を受け止めて、語りかける姿勢を大切にしていた。この語りの空間を創出するきっかけを具体化してゆくことを目的としたい。そのためにはまず民間に口承されてきた説話群の中の音声化・文字化された個々の作品を取り上げて検討し、その中から子ども達と向き合う方法を見つけることを課題とする。	
		子育て支援論	本講義では、まず現代の家族を取り巻く社会的状況の特質と子育て家庭の抱える困難、並びにこれまでの子育て支援政策の思想と現実を吟味し、今日、どのような子育て支援が必要とされているかを明らかにする。次に、子育て支援の実際として、①保育所・幼稚園における支援、②地域における支援、③特別なニーズをもつ家族への支援を取り上げる。最後に、地域の再生と子育て支援を中心としたネットワークの構築の可能性について論及する。これをとおして、今日求められている保育所・幼稚園における子育て支援の機能と保育者の役割についての認識を深めることを目指す。	
		家族援助論	社会の変化とともに家族のあり方も大きく変化してきた。適切な子育て支援のためには、子どもの発達段階を理解し家庭生活や人間関係のあり方を考えることが必要である。本講義では子どもが育つ環境としての家族の持つ意味や機能について基礎的理解を深めるとともに、少子高齢化、核家族化等の家族を取り巻く社会状況や子育てのための支援制度の現状や問題点を学び、保育に携わる者に求められることについて学習する。	
		児童福祉論	本講義では、児童福祉の理念と概念、児童福祉の歴史的社会的背景、現代社会における児童福祉の意義や問題、児童（家庭）福祉に関する法および制度について講義する。さらに今日における児童の成長・発達と生活実態、それらにおける問題点についてもとりあげる。	
		社会福祉論	ウェルビーイングの視座から、わが国における社会福祉の理念と意義、社会福祉に関する法制度を俯瞰的に学び、現代社会において社会福祉実践がどのように展開されているかを理解する。社会福祉の制度的理解と並行し、具体的資格制度、専門職の役割について学び、特に児童福祉がどのように理解されているのか、ミクロ～メゾ～マクロ領域での展開過程を学ぶ。さらに、今日の福祉国家としてのわが国における社会福祉の現状と課題についての理解も目指す。	
		社会福祉援助技術	社会福祉援助技術とは、社会福祉の相談機関や施設等において、相談を受け、日常生活上のニーズや困難な点を把握し、解決や自己実現へ向けて既存の社会福祉サービスを活用するための技術であり、また、個人や地域や組織に働きかけるための技術でもある。現在、保育の現場では、従来のケアワークのみならず、家庭や地域社会における「子育て」に関してこの援助技術が求められている。この講義では、現場における実務に直結する技術を身に付けさせるため、理論→演習→実習というつながりを意識した学習を目指す。	
		園芸療法論	障がいなどで社会的な援助が必要な方々に対して、障がいの有無を問わずに園芸を通じて参加者の心身の向上や社会とのつながりをつくる園芸療法が注目されている。本講義では、園芸療法の歴史、日本国内外の現状、園芸療法のプロセス、利用者と周囲の状況に関する理解、活動・年間プログラムづくり、利用者の把握と記録、活動マネジメントについて基礎的事項の説明を行う。それをもとに園芸をどのように活かすことができるかについて考察していく。	

専門 教育 科目	子どもと 地域	園芸療法実習	障がいの有無を問わずに園芸を通じて、楽しむことが出来る園芸療法は机上の理論ではなく、実践活動である。実際に医療・福祉施設の協力を得ながら、園芸療法の実習を行う。高齢者関連施設、障がい者関連施設、児童福祉関連施設および医療機関等の協力のもとで利用者と実習生が一緒になって、園芸活動に参加しながら、コミュニケーションをとることで目的を達成していく。	
		地域食文化論	21世紀は、生命、食料、環境の時代である。人類の健康を規定しているのが食であり、また食を規定しているのが農であることを認識し、食の果たす根源的な役割を考えることが食文化論である。本講義では食文化論を学ぶ意義、民族と食様式（農耕の始まり、食文化の国際化、食の風土と世界の食様式の多様性）、現代食文化の共通化と国際化、日本食文化の源流（照葉樹林文化と日本食文化の成立）を考察しながら、地域の食文化について理解を深める。	
		地産地消論	環境問題や食の安全性等に対して国民の関心が高まっている今日、地産地消の生産物の役割がクローズアップされてきている。本講義では各地の地産地消の取り組み事例を学ぶ中で、地産地消による地域内市場や地域ブランド形成の理論的意義と地域活性化に果たす役割、地産地消の計画・運営論を検討する。	
		地域計画論	地域計画論は地域社会・生活における快適性の増大をめざすものだが、社会学や経済学、土木学、建築学等様々な分野からのアプローチが必要な学際的な領域を有している。本講義では主に地域計画の基本的な分野を選定して、今後の環境保全型社会への展望をとり入れた地域計画の策定方向を解明していく。	
		生涯学習概論	新しい技術の開発や、新たな知識の創造が絶え間なく行われる現代の社会を生きていくには、学校教育を修了しただけでは、とうてい一生を過ごすに足りるだけの知識や技術を得ることは不可能である。現代社会に生き、社会的な責任を果たしていくには、生涯にわたって、絶えず学習を続けなければならない。この授業では、このような生涯学習必要性の視点に立脚して、生涯各期における学習課題を理解し、個人として、生涯学習をしていく上に必要な最低限の知識を習得する。	
子どもと 自然 環境	子どもと自然	地球環境問題を解決し、自然と人間が共生する持続可能な社会の形成のためには、人間も生態系の一員という意識が必要である。この意識の形成のためには、幼児・児童教育において、自然に親しみ、「感性」を育む教育が重要な役割を担う。本講義では、「共生」をキーワードに、様々な自然環境、生物の相互作用、自然と人間の軋轢と共生などの内容を学び、子ども達の問題解決能力を育成し、自然を愛する心情を育む素地形成を目標とする。		
	子どもの野外レクリエーション	幼児・児童期の子どものは、自然のなかでの遊びを通じて、自然への親近感や畏敬の念を持つようになるとともに、自然への科学的な理解や自然を大切にす気持ちを持つようになる。この授業では、自然のなかでのさまざまな遊びや自然を用いた工作活動、自然観察の方法等を取りあげる。そして、総合的な学習の時間や野外活動など、さまざまな場面において、遊びや活動を通じた環境教育を実践するための知識やスキルを学ばせる。		
	環境教育論	先進国の経済発展は物質的豊かさをもたらす一方、地球温暖化や生物多様性の喪失などの環境問題、貧困、人権侵害など多くの問題を生み出した。これらの問題解決には個人、地域、学校など各界各層において、環境保全への理解を深める必要があり、環境教育の役割が重要視されている。国連は2005～2014年を「持続可能な開発のための教育の10年」とし、日本でも環境教育が重点的に進められている。本講義では、環境教育の意義を理解した上で、教育現場における幼児や児童を対象とした環境教育の現状・問題点を把握し、環境教育の在り方について自分の考えを構築することを目標とする。		

専門教育科目	子どもと自然環境	環境教育演習	環境教育論の内容を理解したうえで、本演習では、教育現場における幼児や児童を対象とした環境教育の現状・問題点を把握し、地域の環境問題の見聞を踏まえて、受講者自身が環境教育のカリキュラム立案をおこなう。さらに、連携小学校や連携幼稚園等で子どもとともに環境について学ぶ模擬授業を行い、環境教育の実践的な力を身につけることを目標とする。	
		学校ビオトープ	学校ビオトープは、理科教育における具体的な教材提供の機能を果たすことはもちろんのこと、環境教育の充実が希求される今日において、子どもたちが多くの時間を過ごす学校空間で、その学びの場としての機能を果たす存在となることは重要である。このような認識のもと、本授業ではまず学校ビオトープについての概念を整理することで、その教育的意義を確認する。さらに、実際の学校ビオトープ作りにあたっての植生復元や生物誘致の手法を習得するなかで、地域の自然環境との調和という視点を養うことを目指すものとする。	
		自然と昆虫	身近ないきもの、昆虫は世界で約100万種が記載され、地球上でもっとも繁栄している生物群である。農業・林業被害を及ぼす昆虫もいるが、いっぽうで農作物の花粉媒介など、人間と昆虫は密接な関係を持っている。自然環境の消失により昆虫の多様性が低下し、昆虫採集の経験のない子ども達が増えている。本講義では、昆虫の観察と分類を通して昆虫の多様性に学び、自然環境と昆虫の適応・進化についての理解を深める。	
		食と農業	食に関する正しい知識と望ましい食習慣を身につけることの意義を農業との関係で解説し、その実践について考察する。具体的には、バランスのよい食生活と身近な食材、地域の農産物とその生産過程、地産地消を実践するための課題などについて学習する。また、それを通して環境問題や食料問題を考察することも目的の一つとする。	
		農業実習	農作業がより楽しくできるように、堆肥作り、雑草対策、繁殖、誘因、整枝・剪定、農薬の取り扱い、農薬散布、マルチ、鉢作り、鉢管理等の栽培管理方法を習得する。この他、栽培農家見学を組み合わせることで生産現場の現状等について理解を深める。また、幼稚園、小学校等の教育現場における農業体験や実習の取り組みの見学、子どもとの対話等を通して、学校教育の一環としての農業体験や実習の役割や重要性について理解を深める。	
		環境問題演習	環境教育は地球環境の危機的な状況を理解するだけでなく、地域社会や日々の生活のなかで具体的に認識し、解決に向けた取り組みの実践につながって行かなければならない。そのためには日本の歴史的経過の中に発生した主な環境問題や今日の地域が抱えている環境問題が身近な課題であり社会のあり方や生活様式の変化と密接に関連していることを認識する必要がある。本科目では、環境教育の一環として、日本の主な環境・公害問題と地域社会が抱えている具体的な環境問題・環境行政の懸案について学習するとともに、現地調査による実体解明・原因究明など実践的に取り組めるように指導する。	
		自然緑地計画論	森林や自然公園、河川空間などある程度まとまった緑地や自然地について、その歴史や利用の実態、問題点、法制度等の基礎知識を身につける。またそれらを守り、より良くするためにプランナーとして広い視野から評価し、計画していく技術について考える。さらに、地球環境問題の視点からグローバルに考えると同時に、一人の市民としても関わっていくことの出来る身近な自然緑地を考えることで、それぞれが自らの自然観を豊かにしていく。	
		グリーンツーリズム論	1990年代、農山村地域の活性化の一つの方向としてグリーンツーリズムがわが国に導入されて以来、各地で様々な取り組みがなされてきている。そうしたグリーンツーリズムについて、①グリーンツーリズムの原型先進地域であるヨーロッパ諸国の展開形態を捉え、②現段階のわが国の様々な取り組みを事例として見ていきながら、③グリーンツーリズムの推進方法と今後の課題を解明していく。	

専門教育科目	子どもの保育と教育	教職概論	教師の仕事についての理解を深め、教職への意識と意欲を高めることをねらいとする授業科目である。また大学における教職課程への入門としても位置づく。本講義では、「教職の社会的性格」、「教職の専門性の特質」、「学校と教師の歴史」、「今日の教育課題と教師」といった項目について学習することを通して、今日の教育が抱える問題と可能性、教師が抱える困難と希望について考え、教職への自覚を高めていく。	
		教育制度論	本授業科目は、現代日本の教育制度についての基本的理解を得ることをねらいとする。講義では、まず近代日本の教育制度及び教育法の史的展開について講義する。次に、現代日本における学校制度を中心とする教育関連の諸制度の理念と実態について解説する。最後に、現代日本の教育政策の動向について諸外国との比較を交えて解説し、日本の教育制度の今後の課題について考察していく。	
		教育課程論	教育課程・カリキュラムは、学習者の発達過程を考慮して編成されなければならないが、同時に、その時代の社会的条件や文化的条件と無関係では存在しえないものである。したがって、本授業ではまず、学校教育における教育課程・カリキュラムの意義および位置づけを、その歴史的経緯、構成原理や諸類型から考察する。その過程で学習指導要領の趣旨や答申等についての理解を深め、教育課程編成に必要な基礎的理論を学ぶことを通じて、教育の今日的課題について検討する。また、実際の編成に当たって考慮すべき諸要素についても論考する。	
		教育の方法と技術	本授業では、子どもの主体的学習を導くための教育方法及び技術について、まずその歴史的概観、基本原理を学ぶ。そのうえで、実践的な教育現場における教材の研究を含めた授業の設計、あるいは評価の問題を考えていく。具体的には、前半で、教育方法に関する理論的な枠組みを解説し、後半では実践検討を通じて、よりよい学習を成立させるための仕組みや条件を探求することで、教育の方法と技術に関する基礎を培う。また、実践現場でのマルチメディア機器の使用や評価の意義とその必要性をも考えていく。	
		保育内容総論	前半では、保育の基本と保育内容、乳幼児の発達と生活、保育内容の歴史的変遷、「保育所保育指針」・「幼稚園教育要領」における保育内容の考え方を取り上げる。後半では、子どもの活動と保育環境、保育者の援助、遊びを通しての総合的指導などについて、保育映像の視聴や話し合いを通して実践的な力を習得させる。さらに保育の計画と評価についても考察する。最後に保育内容と多様な保育ニーズへの対応、小学校との接続問題など保育内容をめぐる課題について検討する。これらを通して、保育内容を総合的に捉える視点を獲得し、保育を構想する力や実践力を身につけることを目指す。	
		保育内容指導法 (環境)	子どもは身近な自然環境や社会的環境、人的環境に触れることにより、様々な事柄に好奇心や探究心、疑問を持つ。本授業では、こうした子どもの思考力の芽生えを培うために、保育者はどのように支えていけばよいのかについて学ぶことを目的とする。また、子どもが自ら環境に関わることを通じて、感性を豊かにし、生きる力を養うことを保障する環境のあり方について検討し、子どもの発達を支える環境の構成者としての保育者の役割について理解する。	
		保育内容指導法 (健康)	心身の健康に関する領域である「健康」についてのねらいや内容を明らかにするとともに、乳幼児の心と体の発育・発達の特異性や身体成長に関わる今日的な問題点などを理解・認識し、子どもの実態に沿いながらからだづくり・健康づくりの面から保育の在り方を追究する。乳幼児の身体活動(運動遊び)や基本的生活習慣、生活リズム、安全などに視点をおき、「健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う」ことをめざして、保育内容を学習する。	

専門教育科目	子どもの保育と教育	保育内容指導法 (言葉)	保育・幼児教育における「言葉の獲得に関する領域『言葉』」の目的と内容について理解することをねらいとする授業科目である。本授業では、まず幼児期における言語発達の特徴について理解を深め、次に幼児の言語発達の特徴について学び、さらに言語発達を促す諸活動と技術について学んでいく。このことにより、保育・幼児教育に携わるものとしての言葉に関するトータルな資質能力の育成を図る。	
		保育内容指導法 (音楽表現)	子どもの発達段階に応じた歌唱、遊び歌、手遊びなどの音楽表現と、楽典、ソルフェージュ、簡易伴奏など音楽の基礎技能を身につけることを目的とする。乳幼児向けの音楽表現には、発達段階に応じたものの他、日本の風情を表す季節感のあるものや地域に伝承されてきた音楽表現が数多く存在する。子どもたちの健全な身体の発達を促し情操を高めるために、多くの音楽表現の習得を通し保育者として豊かな表現力や人間性を養うことを目指す。基礎技能では、弾き歌いや、コードの習得を含めた伴奏法、アレンジや移調の方法を身につける。	
		保育内容指導法 (造形表現)	この授業は、保育内容「表現（造形）」に関する基礎的な造形能力や援助・指導力の育成を目指している。内容は主として、幼児の表現活動の特性を理解するとともに、具体的な実践事例に基づきながら教材の解釈、教材製作のポイントや援助の在り方等を考察する。また、試作や発表を通して、楽しい保育展開ができる知識や技能を身につけることをねらいとする。それらをもとに授業のなかで模擬保育を実施したり、各自が試作した教材を発表する。	
		保育内容指導法 (人間関係)	この授業では、保育所保育指針および幼稚園教育要領が示す保育内容5領域の一つ「人間関係」について理解を深めることを目的とする。保育所あるいは幼稚園での集団生活が始まると、子どもたちは、親以外の大人や仲間との関係や遊びのなかで、人と関わるための望ましい対人スキルや態度、ルールを学ぶようになる。そして、これは生涯を通じた「人と関わる力」すなわち、社会性の基礎となる。本講義では、乳幼児期における人間関係の意義と重要性、潜在的な問題、および保育者の役割について検討する。	
		音楽演習A	弾き歌いや簡易伴奏、様々なマーチ(行進曲)の実践を通し、子どもが意欲的に歌唱し、活動できるような伴奏技術の習得を目的とする。保育現場では、臨機応変に様々な音楽に伴奏づけをする必要に迫られる。現場のニーズに即応できるよう、多様な童謡唱歌を用い、基礎的な音楽理論や和声、およびコードネームの理解をする。和声進行については、実際の響きを必ず耳で確認し、打鍵と響きと理論が一致するように努め、あらゆる旋律に即座に伴奏づけが出来ることを目指す。	
		音楽演習B	器楽合奏によりあらゆる楽器に親しむ。様々な音の調和、ひいては集団における協調性を培う上で合奏は有効である。子どもの興味、関心を引き出し、個性に基づいた表現力や感性、創造力を育てるよう、発達段階に応じた楽器の選択や奏法を習得する。さらに、指揮法を学び、マーチング・バンドの指導や演奏発表会の構成、各種行事や季節に応じた選曲のあり方、歌唱曲などの合奏曲への編曲、楽器による効果音の出し方、またパネルシアター、紙芝居、絵本読み、劇等への応用の仕方を学ぶ。	
		音楽演習C	音楽の表現力を向上させ、身体と精神の調和を促すリトミックを学習する。子どもの発達段階に応じたリズム運動やゲーム、そして、ピアノによる伴奏、ないし効果音の出し方を出来る限り多く身につけ実践できるようになることを目標とする。リトミックにより、主にリズム感、そしてメロディーやハーモニーに対する感覚を磨き、音楽の表現能力の向上だけでなく、反射神経や集中力、注意力、記憶力、自発性などを養い、身体を有効に活用した音楽指導ができることを目指す。	

専門教育科目	子どもの保育と教育	音楽演習D	基本的な和声進行の理解に基づいた簡易伴奏や弾き歌いが出来、基礎的なピアノ技能を習得した学生を対象に、より高度な鍵盤技術の習得を目指す。基本的な和声進行の理解を徹底し、さらに多様なコード(特にサブドミナント機能)を学ぶ。また、西洋クラシック音楽のピアノ教材を用いて演奏技術と芸術的表現力を身につける。バロック、古典派、ロマン派、など様式の異なる各時代の小品を通し、多様な表現方法に親しみながら鍵盤技術の応用力を広げる。	
		図画工作演習	幼児の造形表現の特質を理解し、豊かな表現活動を援助するために指導者として必要な基礎的・基本的な知識や技能を、具体的な実技や制作を通して体得することを目指している。演習に関わる主な素材としては、「パス類」「版画材」の他「身近な素材」などを取り上げ、それらの特性を生かした作品や教材等を制作し、造形表現の楽しさを味わうとともに、指導力、援助力の向上を図る。	
		幼児体育	この授業は、子ども達と身体運動を通して係わることのできる実践力を養うことと、子ども達とともに身体運動のできる自分自身のからだをつくることを目的としている。授業においては、幼児を対象とした身体運動を紹介し、それを実技として実施し、さらに学生自身に授業を立案させ、模擬授業として実践させる。	
		国語	子どもが国語の適切な表現力、伝達力、思考力、想像力等を身につけ、子どもの国語に対する関心、尊重態度を育て、話すこと、聞くこと、書くこと、それぞれの能力を高めるためには何が必要かを理解し、言語の特徴や決まり、国語の特質や伝統的な言語文化等などの基礎知識を習得する。また、伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項として、昔話・伝説・短歌・俳句・ことわざ・故事成語・古文・漢文にもふれていく。	
		社会	小学校社会科の学習内容は、子どもの身の回りの地域から順次、市町村、都道府県、日本、世界へと学習内容が同心円的に拡大していく内容構成(同心円拡大原理)となっている。そこで、各学年の指導内容に関する基礎的知識を習得するために、総合的に学ばせた上で、特に取り扱い上のポイントとなるような主題を取り上げ、具体化・焦点化する。また、平成20年3月に告示された新学習指導要領についても理解を深める。さらに、地域調査のフィールドワークを行うなどして、研究の基本的技能である地域調査の方法を身に付けることを目指す。	
		算数	小学校を算数といい中学校以上を数学というのは日本独自であり、諸外国ではすべて数学である。本来、小学校でも数学的内容を教えるというのが共通の認識である。算数科における数学的内容は学習指導要領に示されている領域に対応している。ここでは、算数科の実践的な内容と関連づけながらその数学的背景について講義する。今回の新学習指導要領では算数的な活動が重視されることになるが、その活動を作るには指導する側に数学的な概念の十分な理解が必要である。	
		理科	新学習指導要領が理科教育に求める、「問題解決能力や自然を愛する心情、科学的な見方や考え方」の育成は、個別の知識ではなく、様々な自然現象を、現象のつながりの中で総合的に理解することが必要である。本講義では、生態系の構成と生物間の相互作用、生物の進化と適応について総合的に学ぶことで、小学校の2領域「物質・エネルギー」と「生命・地球」の内容を網羅する知識と科学的思考法を身につけることを目標とする。	
		生活	小学校の低学年を対象とする「生活科」は、学生自身が学習経験を持たない新しい教科である。この点も考慮して本講義では、まず「生活科」誕生の歴史的・理論的背景について解説することから始め、教科としての目標・内容・指導上の留意点等の基礎的事項に関する理解を深めていく。このことを踏まえて、教育実践の先進的な具体的事例を提示しながら、授業の展開方法や今後の課題について考えていく。	

専門教育科目	子どもの保育と教育	家庭	家庭科教育では、生涯にわたる家庭生活の基盤となる能力と実践的な態度の育成が目指される。新学習指導要領では、「A 家庭生活と家族」「B 日常の食事と調理の基礎」「C 快適な衣服と住まい」「D 身近な消費生活と環境」と項目立てされ、旧学習指導要領に比べ内容がより明瞭に示されている。これらの内容にかかわって、子どもの生活実態を把握してよりよい生活を志向できるような基礎的知識・技能の習得を図る。	
		音楽	幼児・児童の音楽教育において、子どもたちが音楽表現の楽しさに気づき、音楽経験の生活へ与える潤いを知り、鑑賞能力を伸ばすことは重要な要素である。子どもたちの音楽に対する興味と能力を育てるため、授業では、音楽史、理論など基礎知識や基本技術の習得を目指す。また、日本古謡や文部省唱歌、楽典と和声を含む基礎的な西洋古典音楽理論を習得し、鍵盤を用いて実際のコードの響きを指と耳で覚え教育現場での実践に役立てる。	
		図画工作	本授業では、幼児児童の発達段階に応じた図画工作の目標と学習内容を理解し、基礎的な技術・知識を身につけ、製作活動の喜びを自ら体感することをねらいとする。幼児期・児童期の子どもにとって絵画はもっとも身近な表現活動であることから、その指導においては、心理発達の段階、精神衛生としての側面といった多角的な視点が必要となる。心身の発達と絵画の持つ役割との関係を子どもの作品や資料を基に考察し、創造的な造形活動の理論と実際について考察する。また、実技演習を通して材料の特質を理解し、多様な表現方法を習得する。	
		体育	体育の指導にはさまざまな資質が求められているが、この授業ではその中でも重要視される運動技能の習得を目指していく。とくに器械運動、ボール運動、陸上運動を中心に、子どもたちに「やってみせる」ことができるようにすることを目標にし、自分自身の技能を向上させるためにどのような身体の使い方をすべきか考え、実践していく内容とする。	
		子どもの英語教育	子どもの発達段階に応じた英語の指導方法を学ぶ。この授業では、児童英語教育の概要、英語学習者としての子どもと大人の違い、英語の歌やゲーム、活動などの授業の教材、TPR、MATなどの教授方法等について講義する。また、授業内での教員によるデモンストレーションや模擬授業を通じて、子どもに対する英語教育の実験を体験し、指導計画の作成や授業の実施、ALTなどのネイティブ・スピーカーの活用のあるり方について指導する。	
		教科教育法（国語）	この授業では、子どもに対話・記録・報告・要約・説明・感想などの能力が身に付くような指導力を養成していく。そのためには、まず基本となる小学校学習指導要領「国語科」の目標・内容（話すこと・聞くこと・書くこと・読むこと・言語事項）の十分な理解を図る。加えて、学習指導案立案に向けて、文学教材及び説明文の単元について学年及び単元を特定して実践的手法で取り組む活動を行う。	
		教科教育法（社会）	第2次世界大戦後発足した小学校社会科の指導方法の変遷及び現在進められている社会科教育の基礎的な理論を理解することや実践に関する内容や方法の基礎的・基本的な事柄の習得をとおして、小学校教員として必要な授業展開の基本的な力の育成を目指す。また、今回、改正された教育基本法や学校教育法との関連や背景等についても考える。更に、それらを反映した新学習指導要領の求める授業展開を構想する基礎的な力量を育み、児童が意欲的に学習に取り組む授業を構想する能力を、学習指導案作成と模擬授業の実施をとおしながら身に付けさせることを目指す。	
		教科教育法（算数）	幼稚園から小学校までの全体を見渡した算数科の教育方法について講義する。 1. 教育基本法と幼稚園教育要領並びに学習指導要領とその変遷 2. 幼児教育も含めた算数教育の教科内容とその方法論 3. PISA 調査結果と世界における算数教育の動向	

専門教育科目	子どもの保育と教育	教科教育法（理科）	自然界の基本的な仕組みについて、実験や観察を通して理解することによって、小学校で理科の授業を行う際に必要とされる基礎的な指導力を養うことを目的とする。身近に見られる土や岩、草や木、小動物や虫、水の中の微生物などを題材として、自然のありさまを観察することによって、小学校教員として必要な知識、技術を習得し、さらに、親しみやすく楽しい理科の授業を行い、自然に興味を持たせるような指導方法を習得する。	
		教科教育法（生活）	生活科という教科の目的を達成するためには、子どもの発達に応じた指導方法の研究が必要である。この教科は特に教師の合科的な創意工夫が要求される。小学校1年生向けには幼小連携の視点から共同の遊びの学びの観点、2年生向けには子どもを取り巻く社会や自然への気づきの質的向上の観点に立ち、上級学年の各教科への連携を図る。そのために指導計画の作成や体験及び活動の具体的なプログラムの作成、さらに児童の達成度の評価方法についても取り扱う。また、必要に応じて模擬授業や教材開発も取り入れていく。	
		教科教育法（音楽）	初等教育における音楽科教育の目標、各領域の指導内容、教材、指導計画、評価方法について理解し、音楽科の授業を構成し実践するに必要な基礎知識、実践力を身につける。学習指導要領、および音楽教育史の概観を行うと共に、教材研究を含めた歌唱、器楽、創作、鑑賞の各指導法について実践的な考察を行う。幅広いジャンルの中から自ら選んだ音楽、創作した音などを教材化する試みも行う。また、指導上必要不可欠な初等音楽の基礎知識、基礎技能について整理確認し、指導実践の基を確立する。	
		教科教育法（図画工作）	本授業では、図画工作科の目標や内容構成を踏まえながら、児童の造形的な能力の発達に即した実践的な指導力を身につけていくことをねらいとする。制作を通して図画工作科で使用する基本的材料・用具の扱いの習熟をはかるとともに、実際の子どもの作品の鑑賞を通して、児童作品の見方や鑑賞活動のあり方を検討する。また教師個人の好みや美的感覚を強制するような指導観・教材観ではなく、一人ひとりの表現のよさを認め、意欲的な創作活動が展開できる指導法を考える。	
		教科教育法（家庭）	本授業では、（1）家庭科教育の意義、（2）現在の生活課題と家庭科教育、（3）小学校家庭科学習指導要領（新）、（4）学習計画の立て方、（5）学習指導案の作り方、（6）学習指導法の工夫、（7）教育評価のあり方、（8）家庭科の施設と設備について学習する。そこで、まず学習指導要領から内容を確認し、各学年の目標と内容をよく理解して指導計画を立てる。児童にとって達成感ある学習となるよう、また実践的・体験的な活動を通して学ぶことができるよう教材研究や指導方法について学ぶ。	
		教科教育法（体育）	この講義では、小学校における体育指導のあり方について指導していく。とくに小学校の学習指導要領について検討し、現場における体育授業の進め方を考察する。また体育科の目的・目標を概観し、これからの社会に求められる健康観について考え、各種教材の有効性と効果的な指導法について理解し、実践的能力の育成を目指していく。	
		道徳教育の研究	道徳教育に関する基礎理論を教育の現状とかかわらせながら学習することをねらいとする。本講義では、「道徳教育の基本問題」、「子どもの現状と道徳教育の課題」、「道徳教育の歴史」、「道徳性の発達理論」、「学校における道徳教育の実際」という柱を立てて、道徳教育に関する基本認識を形成するとともに、指導案の作成を含めて学校における授業方法の工夫についても指導していく。	
		特別活動論	子どもたちの自主的、集団的活動の時間である特別活動は心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己を生かす能力を養うことを目指したものである。本講義では、「特別活動」の意義や学習指導要領の歴史的変遷、特質等について考察することで、特別活動に関する基本的役割に関する理解を深める。また、具体的な実践事例の検討や、指導計画の作成を行うことで、特別活動を進めることのできる教師としての実践的指導力の基礎を身につけていく。	

専門教育科目	子どもの保育と教育	生徒指導・進路指導	生徒指導は、日常生活における指導を通して子どもの人格発達を支援する営みであり、進路指導は子どもの将来への見通しを育む営みである。急激な社会変化のもとで、子どもたちは人間関係をめぐる困難や将来生活への不安を抱えており、今日いっそう計画的・組織的な指導が求められている。本講義では、こうした子どもの現状を踏まえて、生徒指導編で子どもの学校生活における諸問題とそれへの対応を重視して講義し、進路指導編で小学校卒業後のキャリア形成を視野に入れた指導のあり方について講義する。	
		特別支援教育論	特別支援教育のこれまでの歴史を概観するとともに、知的障害や肢体不自由、病弱など、特別な教育的ニーズを持つ子どもの行動・心理特性、不適応行動への対応、教育的支援と家族支援の在り方について理解を深める。また、通常の学級に在籍する、学習障害や注意欠陥多動性障害、高機能自閉症などの幼児児童に対する適切な指導及び支援の在り方についても述べる。これらのことを通じて、特別支援教育の理念や基本的考え方を身につけていく。	
		キャリア教育演習	教員としていかに自己実現していくかという観点から、教育現場の実状や必要とされる知識技能について学ぶことをねらいとする。演習では、現職教員の声やさまざまな統計などに基づいて、教員の生きがいや悩みなどに触れ、教員として自己実現していくための課題について討議しながら考えていく。また、授業はもとより学級経営や家庭・地域との連携などの基本的な教育課題に関わって求められる方法や技能について具体例を提示して考えさせ、身につけさせていくことをめざす。	
		教職実践演習	大学における教職関連科目の学習及び教育実習等での学習を踏まえ、①使命感や責任感、教育的愛情、②社会性や対人関係能力、③幼児児童理解や学級経営等、④教科・保育内容等の指導力の各事項に関して、内容の確認と確実な習得をめざし、教員としての実務に十二分に対応できる能力として高めることをねらいとする演習とする。 ※別途資料添付	
保育・教育実習	保育実習	保育実習事前事後指導	保育実習をより充実した経験とするため、「保育実習事前事後指導」を実施する。事前指導では、保育実習の意義や目的を明確化すると同時に、観察・参加の仕方、指導案の作成方法、実習日誌の書き方等を講義する。また、基礎的な保育の実技指導も行う。事後指導では、保育実習での経験を総括、評価を行い、今後の学習課題とする。	
		保育実習Ⅰ	保育実習Ⅰでは、保育所（園）において10日間の実習を行う。この実習では、実習の4段階のうち、①見学・観察、②保育参加・補助、③部分指導までの3段階を主に体験する。保育所（園）での実習を通じて、大学の講義等で学んだ幼児に対する知識や理解を深め、定着をはかるとともに、保育士としての実践的な能力を養うことを目的とする。	
		保育実習Ⅱ	保育実習Ⅱでは、児童福祉施設の内容と機能について実習を通して体験的に理解することを目的とする。保育士の補助をしながら、児童に接することにより、援助、療育、保育、指導等の技能を習得する。また、児童の生活状況や心理、保育士の職務内容や他の職員とのチームワーク、社会人としての基本的マナーなど保育士として必要な基礎的・基本的な事柄について体験を通して学ぶ。	
		保育実習Ⅲ	保育実習Ⅲでは、保育所（園）において10日間の実習を行う。基本的には保育実習Ⅰ及び保育実習Ⅱにおいて経験した実習に加えて、新たに大学で学んだ講義及び演習等の成果を生かしながら、乳幼児の発育状況に応じたねらいの設定、保育内容の選択、保育方法の決定などより深く学習する実習に取り組む。現代の保育所の保育上の様々な課題や問題のある乳幼児とその家族に対して保育所（園）の保育士がどのようにかかわっているのか理解を深めることを目指す。また、保育士としての援助技能をさらに高めることを目的として体験を通して学ぶとともに、保育士になるという自覚や子ども観・保育観の確立並びに自己の課題の明確化を目指す。	

専門教育科目	保育・教育実習	保育実習Ⅳ	<p>保育実習Ⅳでは、児童福祉施設において10日間の実習を行う。基本的には保育実習Ⅰ及び保育実習Ⅱにおいて経験した実習に加えて、新たに大学で学んだ講義及び演習等の成果を生かしながら実習に取り組む。発達障害を含む様々な課題や問題のある児童とその家族に対して保育士がどのようにかかわっているのか理解を深めることを目指す。また、保育士としての援助技能をさらに高めることを目的として体験を通して学ぶとともに、保育士になるという自覚や児童に対する児童観・保育観の確立を目指す。</p>	
		観察実習 (事前事後指導含む)	<p>本実習は、幼稚園もしくは小学校において、それぞれに必要な基礎的能力の習得をめざす第一段階の実習として位置づける。具体的には、幼稚園もしくは小学校を訪問し、それぞれの所属の指導者のもと、子どもたちの姿を観察することによって幼児及び児童についての理解を深めると共に、それぞれの現場への理解を深める実習とする。今後経験する各実習のスタートとなる実習であり、教育現場の参観を通じてとらえた現在の幼稚園・小学校教育の現状と課題を事後指導で確認する。</p>	
		介護等体験 (事前事後指導含む)	<p>高齢者や障害児・障害者に対する介護等の体験を自らの原体験として持ち、人間の尊厳や崇高さについて十分に考える場として設定することが小学校教諭一種免許状を取得しようとする学生にとって必要な要件となる。社会福祉施設及び特別支援学校においてそれぞれの担当指導者の指導を受けながら、社会福祉施設及び特別支援学校での障害児や障害者の生活支援や教育活動の在り方について実務的な体験を通して学ぶ活動を行う。体験の期間は社会福祉施設5日間、特別支援学校2日間の計7日間とする。</p>	
		教育実習事前事後指導	<p>事前指導としては、小学校・幼稚園における教育実習の意義と目的、実習の内容と方法、実習日誌の書き方、記録の取り方、指導計画及び学習指導案・保育指導案の作成の方法等について講義する。事後指導としては、教育実習のまとめ及び実習反省の生かし方、実習後の自らの学習の方向性などについて焦点化させる。加えて、実習に参加した学生を数グループに編成し、グループ別の発表を行って反省等を集約させると共に、1・2年生を参加させ、1・2年後教育実習に臨む学生の教育実習に関する意識及び意欲を喚起することにつなげる。</p>	
		教育実習Ⅰ	<p>教育実習は、大学において学んだ理論や技術を実際の場で実践するものである。幼稚園及び小学校において指導教諭等の指導を受けながら実習を経験することにより、教師の仕事の重要性について理解する。また、園児や小学生との直接の触れ合いを通して、大学で習得した知識や理論を教育の現実に適用することで実践的な能力を磨く。加えて、教職についての使命感を高め、自己の能力・適性について自覚すると共に、新しい課題を発見し、以後の自己の大学での学びに反映させる態度を身につける。この実習は3年次後期に行い、同内容の指導を複数の教員で行うものとする。</p>	
		教育実習Ⅱ	<p>この実習は教育実習Ⅰに続いて4年次の後期に行う。教育実習Ⅰで学んだ経験に加えて、幼稚園及び小学校の指導教諭等の指導を受けながらより幅の広い教育実習として位置づける。教育実習Ⅰを体験した後、おのおのの学生が課題を設定し、焦点を絞りつつ、経験の積み上げが生きる実習となるよう指導する。幼稚園教育や小学校教育の現状および重要性についての認識を一層深め、幼稚園教育及び小学校教育に携わる教員の使命感や指導技術や技能をより一層磨く内容とする。同内容の指導を複数の教員で行う。</p>	

<p style="text-align: center;">専門 教育 科目</p>	<p style="text-align: center;">ゼミ ナール</p>	<p>子ども教育入門ゼミ</p>	<p>(共通に扱う内容)</p> <p>入門ゼミであり、与えられた課題や地域活動や観察実習などで気づいた問題について、討論を通して理解を深め、各自が調べた資料や参考文献などをもとに問題や課題の核心に気づくとともに、お互いの人間関係を構築して、4年間の協働した学びができるように配慮する。加えて、ブレインストーミングの方法、情報の収集方法などのメディアリテラシー、文献検索の方法、発表スキルなどを学ぶ。</p> <p>(2 神田嘉延)</p> <p>地域の子どもたちとの出会いなどの各自の経験の中で、子どもたちの食の問題や環境への関わり方について、気づいた点などを報告し、それに関連するさまざまな問題について、討論を通じて解決すべき課題を発見していくことをめざす。今後必要な、発表の仕方、討論の進め方とマナー、関連する情報の収集のしかたを修得し、教育学の立場から問題の核心をつかむ方法を学ぶ。</p> <p>(5 島井哲志)</p> <p>学校や地域で出会った、子どもたちの抱えているさまざまな問題に気づくこと、その問題の背景や関連する要因を考え、調べていくことで、それが子どもの発達という過程のなかでどのような意味をもっているのかを理解する。また、そのような問題を、学生という立場の自分自身がどのように支援することができるかについて、話し合いを通じて考えていき、問題の核心をつかむ方法を学ぶ。</p> <p>(6 古賀隆一)</p> <p>このゼミでは、幼児期・児童期の子どもの造形・表現活動を題材として、文献の収集方法や発表資料のまとめ方、討論、レポートの作成のしかた等の大学生として必要な基本的研究能力の育成をはかる。ここでは、とくに、「子どもの豊かな造形・表現活動をうながすのは何か」という問いを中心に据える。そして、ゼミの活動を通じて、保育士や教師による適切な働きかけの重要性に気付くとともに、子どもの造形・表現活動に対する観察力と洞察力を養う。</p> <p>(9 遠藤晃)</p> <p>自然を題材として、テーマ設定・データ収集・解析・発表の一連のプロセスを重視する体験型・問題解決型の環境教育は、子ども達の「生きる力」を育む有効な手法と考えられている。このゼミでは、自然環境を題材とした環境教育について、学生が自らの体験を整理し、発表することで、子どもの成長・発達における環境教育の理念について理解を深めるとともにそのために必要な方法を学ぶ。</p> <p>(① 宮内孝)</p> <p>この授業では、保育士や教員を目指して、4年間の学びの基礎となるスキルや方法を身につけることを目的とし、子どもの身体や運動に関わる課題についてどう対処していくのか、どのように考えていけばよいのかをゼミの中で討論や発表を通して探っていく。またそのために必要な文献や資料の調べ方などの必要とされる方法を学ぶ。</p> <p>(12 春日由美)</p> <p>子どもたちが生きる環境をより良いものにするためには、大人たちが彼らの抱える様々な問題について問題意識を持ち、問題の改善について考えることが大切である。このゼミでは、学生自身がこれまでの経験の中で感じていた、子どもに関する様々な問題について情報を集め、発表し、問題の解決について討論することを目的とする。それにより発表する力や、学問として考える力を身につけるとともに、そのために必要な方法を学ぶ。</p> <p>(13 西村純子)</p> <p>保育者、教師が音楽指導を実施するうえで必要な音楽に関する基礎的な内容を学びながら、現在の保育園、幼稚園、小学校の現場が抱える問題を学生自らの体験や経験も踏まえて理解し、音楽指導により如何にそれらの問題にアプローチできるか、グループごとに情報収集や解決策の提案を行うことを目標にする。子どもの健全な発達を促し、現場での問題解決につながるような音楽を用いた環境の構成の具体的な方法について学ぶ。</p>
---	---	------------------	--

<p style="text-align: center;">専門 教育 科目</p>	<p style="text-align: center;">ゼミ ナール</p>	<p>子ども教育プレゼミ</p>	<p>(共通に扱う内容)</p> <p>子どもの心身、子どもの学び、子どもをめぐる地域（環境）などから、学生自身による課題または教員の指導できる課題を設定し、PBL（Problem-Based Learning）の手法を取り入れてゼミをすすめる。設定された課題を深めるための文献や情報を見つけ、必要であれば調査を行い、討論を通して、課題探究の方法を身につけることをめざす。</p> <p>(1 黒木哲徳)</p> <p>数や図形を対象として、子どもがいま持っている数学的概念についてPBLの手法で明らかにする。子どもの観察を通して、数や図形の認識について気づいたことを発表させ、いま自分自身が持っているどのような概念に関係しているかを発表し討論する。その中から、共通に持っている概念とそうではない概念に気づき、それらの数学的概念に関係した文献を検索し、子どもの概念形成の道筋について討論して自分なりの結論を出す。その結論をもとに再び子どもを観察し、自分たちの考えがあっていたかどうかを検証することを通して探究の方法を学ぶ。</p> <p>(2 神田嘉延)</p> <p>食や農に関係した問題に関して地域の活動や日常的な体験を通じて、問題となる課題を見つけ、その解決のために、学生相互の討論や、関連の情報を収集することによって、解析し理解を深めていく。さらに、教育者や保育者を目指す学生として、これらの問題について果たすべき役割について考え、環境や食育について調べて発表をし、それを教育社会学的な視点からとらえることができるようにすることを通して探究の方法を学ぶ。</p> <p>(3 赤松國吉)</p> <p>学生はこれまで、受動的な立場で授業や学校を見つめて、自らが必要とすることについて情報を得ながら自らの学びを充実させてきたが、指導者になるには、学校での教育活動を教え導く立場から客観的に見つめていく能力が必要である。また、指導する側にあつていかに子どもに分かりやすく指導できるかを考える力が教員の専門性として不可欠である。したがって、身の回りで起こる様々な社会的事象を取り上げ、教育の枠組みの中でどのように指導を構想していけばよいかを、学生間での論議を通してその核心を探究する方法を学ぶ。</p> <p>(4 矢口裕康)</p> <p>三世同居が当たり前であった時代、子どもの人間性を形成する上で「民話（民間説話）」の存在が大きな位置を占めていた。現在では民話伝承が読み聞かせという行為へ移行しつつある。読み聞かせを<読むを語る>へ<聞くを聴く>へと深化させ、語り聴かせへと達すること目的とする。このために家庭・保育現場での読み聞かせの現状を調査検討し、学生自身の語り聴かせを実現してゆく過程を考えることを通して課題を探究する方法を学ぶ。</p> <p>(5 島井哲志)</p> <p>子どもたちは、一人ひとりが個性的な存在であるが、その発達のプロセスも個性的な特徴をもっているといえる。学生一人ひとりが、自分の出会った身近な子どもの持っている、心身のさまざまな課題について、文献情報を含めて、理解することをめざし、その中から、望ましい支援とはどのようなものか、学生自身がそれを実現するためには何を学んでいく必要があるかを自己発見的に考えていくことを通して探求の方法を学ぶ。</p> <p>(6 古賀隆一)</p> <p>幼児期・児童期の子どもの造形・表現活動には工作からオブジェまで様々なものがあるが、ここでは、その中でも子どもの絵画作品を取り上げて、その特性や発達の変化について検討していく。その際、できるだけ数多くの子どもの絵画作品にふれ、それらを題材にして討論を行う。これらのことを通じて、子どもの絵画作品を観る目を養うとともに、子どもの描画活動に際しての援助や配慮のあり方について学ぶ。</p>
---	---	------------------	--

<p>専門教育科目</p>	<p>ゼミナール</p>	<p>子ども教育プレゼミ</p>	<p>(7 澁澤透)</p> <p>子ども教育学を専門的に学習研究していくための基礎的な力を養うことをねらいとする。現代の子どもと教育をめぐる諸問題について、基本的な資料や統計を収集・整理し、学生の自らの教育経験や学校ボランティア活動の経験等も踏まえて集団的に討議し、分析していく。学生自身が問題を発見し、討議しながら考えていくことを重視するが、適宜問題ごとの代表的な理論を紹介し、それを踏まえた課題探求の方法について学ぶ。</p> <p>(8 黒川久美)</p> <p>遊びは子どもの自分づくりのための最高の舞台である。達成感とともに、失敗や、情けなさ、悔しさ、痛い目にあうことなども含めて、現実と格闘することの「おもしろさ」を実感できる豊かな遊びを保障していくことが求められている。そこで「遊びのおもしろさ」をテーマに、学生自らが様々な遊びを収集するとともに、遊びを実体験する機会を設ける。それぞれの遊びの「おもしろさ」について考察する中で、保育における遊びの実践研究への興味・関心を醸成することを目指す。また、遊びの実体験は学生の「自分再発見」の機会となることも期待され、上記のようなプロセスを通して課題探究の方法を学ぶ。</p> <p>(9 遠藤晃)</p> <p>これまでの「知識伝達型」から「プロセス重視型」へと我が国の教育方針は大きく方向転換し、自然を題材としてプロセスを重視するテーマ探求型の環境教育は、子ども達の「生きる力」を育む有効な手法と考えられている。このゼミでは、学校教育における環境教育の事例を取りあげ、環境教育の問題点について自分自身の考えを深める機会とするとともに課題探求の方法について学ぶ。</p> <p>(① 宮内孝)</p> <p>子どもの運動不足や身体能力・体力の低下が問題となっている。このゼミでは子どもの身体活動をテーマとし、運動面から見た子どもの特徴や子どもを取り巻く環境について考え、学生の自らの運動経験等も踏まえて集団的に討議し、子どもが本来持っている身体機能を発揮するためにはどうすればよいのか、さまざまな角度から考察していくことを通して課題を探究する方法を学ぶ。</p> <p>(11 若宮邦彦)</p> <p>現代の子どもたちを取り巻く環境は複雑であり、また虐待など子どもと家庭に関する問題への取り組みも注目されている。そのため子どもたちの健やかな成長を支える者には、子どもの成長や親の子育てを支える様々な仕組みを理解しておくことが不可欠である。このゼミでは、子どもや親の抱える問題や、子どもや親を支える児童福祉に関する文献をもとに、PBLの手法を用いて理解を深め、児童福祉についての学生自身の問題意識を高めるとともに課題を探究する方法を学ぶ。</p> <p>(12 春日由美)</p> <p>子どもたちは、一人ひとりがかけがえない大切な存在であり、大人はその成長を支える役割を担っている。このゼミでは、子どもたち一人ひとりを尊重し、その子が生きていくことができるために、大人たちはどのように子どもたちに接し、支えていけばよいのかについて、子どもの心の発達や問題と言った「子どものこころの理解」という視点から、発達心理学や臨床心理学に関する事例研究や調査研究をもとに、PBLの手法で考えることを通して、課題探求の方法を学ぶ。</p> <p>(13 西村純子)</p> <p>どのような実践的音楽指導が子どもの情緒的、社会的、道徳的な発達に必要で適切な刺激と援助が与えられるか、PBLの手法に基づき、自らの音楽表現法を創出することを目指す。子どもの教育と音楽、そして社会、自然環境の相互作用について注目し、俯瞰的な視点で子どもの音楽教育について考え、新たなテーマを見出し、解決策を提案していくことを目標とするとともに課題探求の方法について学ぶ。</p>
---------------	--------------	------------------	---

専門教育科目	ゼミナール		<p>(14 磯部美良)</p> <p>急速な都市化や自然環境の破壊により、人々は、自然と切り離された生活を余儀なくされている。こうした影響を直に受けているのが子どもたちであり、何不自由ない生活の一方で、いじめや不登校、非行、生活習慣病など、子どもの心身にかかわるさまざまな問題が顕著になってきている。このゼミでは、「子どもと自然環境」をテーマとした国内外の取り組みや調査報告を題材に、PBLの手法を通じて、子どもの心身の発達に対する自然のなかでの遊びや体験の重要性について考察していくとともに課題探究の方法を学ぶ。</p> <p>(15 國枝裕子)</p> <p>価値観が多様化された現代社会において一元的な価値は成立しにくく、とくに、誰もが体験者である「教育」という事象については、誰もが多様な教育観を語る事が出来る一方、個人においては既存の教育のあり方を自明のものにとらえてしまいがちとなる。このゼミではそのような教育にまつわる固定概念を砕き、事実にして自らの目と頭で考える力を養うことを目指す。具体的には、自らの子ども期の被教育経験や子どもとふれあうボランティア活動等の中で生じた素朴な疑問をもとに課題を設定し、さまざまな資料を用いて論理的に考察を進めていくとともに課題探求の方法について学ぶ。</p>	
		子ども教育専門ゼミ I	<p>(共通に扱う内容)</p> <p>3年次に通年開講する。専任教員がそれぞれの専門領域について行うゼミである。専任教員の専門は大きく三つの分野「発達」「教育」「環境」のいずれかに関わっており、これまでの大学での専門の学びを統合できるようにするために、主としてこの三つの分野からのテーマを設定し、学生の興味関心の意向も取り入れて、課題探究能力を高めるとともに、4年次の卒業研究へとスムーズにつなげることを目標とする。</p> <p>(1 黒木哲徳)</p> <p>学生との協議で内容を設定するが、新学習指導要領で強調された算数的活動の観点から子どもの遊びと数学的内容との関わりを内容とする。そのための教員の数学リテラシーの育成を意識したゼミとし、数学的内容にかかわる子どもの遊びの内容について調べる。文献をもとにその由来や歴史、諸外国での関連する内容を調べ、各自がそれについて発表し、どのような遊びがどのような数学的概念を形成するのかを討論し、それらをもとに算数的活動の教材を作り、幼稚園・学校の現場や子育て支援センターでそれを実施することを通して、これまでの学びを統合し、今後の卒業研究につなげていくとともに課題探究能力を高めていく。</p> <p>(2 神田嘉延)</p> <p>農業が身近にある地域の中に育つ子どもたちに対して、食と農の関係や、環境と人間の営みのかかわりをどのように伝えていくのかを考察する。学生一人ひとりの興味を、文献研究などを通じて学問的に追求すると同時に、自ら経験することを通じて掘り下げることをめざす。ここでは、卒業研究に向けて、それぞれがゼミでの発表や相互の討論を通じて、自分の興味を広げ、また、深めることを目標とするとともに課題探究能力を高めていく。</p> <p>(3 赤松國吉)</p> <p>2年次「子ども教育プレゼミ」を受けて、さらに教員として専門性や課題追求能力を高めるゼミとする。子どもの学習に対する興味関心は、様々なことが要因となって生じる。そして、適切な指導援助によって拡大され、学習課題へと構築され子どもが自ら学ぶ行動へと継続されていく。小学校においても、子どもの内発的な学習意欲を喚起し、子ども自ら探究的に学ぶ学習指導を追求する姿勢が指導者に求められる。本ゼミでは社会科教育の立場からそれらを、授業構想の立案の在り方、資料活用の方法、発問の在り方、板書の在り方、教材教具の作成や提示の在り方など具体的に学生間で論議するとともに、今の教員に必要とされるリテラシーについて考え、卒業研究につながるよう指導する。</p>	

専門教育科目	ゼミナール	子ども教育専門ゼミ I	<p>(4 矢口裕康)</p> <p>紙芝居・絵本・民話(民間説話)等の言語素材が、一人ひとりの成長にどのようにかかわっていけばよいかを中心に考えていく。その際、一人の子ども・集団としてのクラス・園(幼稚園・保育所)等での言語活動の具体的な実践記録も試みる。またその観点から、学生自身の実習体験をまとめ、発表・討論を通して研究主題を見つけ出す指導をする。卒業研究を意識させつつ、課題探究能力を高めていく。</p> <p>(5 島井哲志)</p> <p>子どもを中心とした心身の健康問題について、一人ひとりの興味関心に基づいて、研究論文を読み、理解を深めることを中心に進めていく。一人ひとりの問題関心を深めるとともに、さまざまな研究論文で用いられている研究方法を理解し、それらを用いて研究することの意味と、研究を通じて得られる実証的知見(エビデンス)が、健康教育や健康心理学などの応用的学問にもつ意味について理解を深めて卒業研究へのステップとし、同時に課題探究能力も高めていく。</p> <p>(6 古賀隆一)</p> <p>子どもの絵画は、成長にともなって変化していき、また、生活環境によっても変化する。ここでは、造形指導の導入部分を課題とし、良い絵とは何か、また、指導するとはどのようなことを指すのかを基本に考えていく。造形教育では心象表現、構成表現と共に色彩も大切な要素のひとつである。色彩は感覚的な要素をもつものであるが、理論の裏づけを通して、授業現場での指導に際して対応できる指導力を身につけるために何が必要かを考える。さらに作画の実習を通して、色彩感覚を理論的に身に付けることでより実践力の向上をはかり、卒業制作へとつないでいく。</p> <p>(7 澁澤透)</p> <p>今日、急激な社会変化の中で、子どもの発達にさまざまな影響が現れている。教育は、こうした社会の「形成」作用の特質を把握して、有効な発達支援を行っていくことを要請されている。本ゼミでは、主として戦後における代表的な教育実践(記録)を取り上げ、実践の背景となる社会状況、教師の子ども観・教育観・方法論等について検討し、これまでの学びを統合し、学生の実践的な教育認識を養成するとともに課題探究能力の向上をはかり、卒業研究へとつなげていく。</p> <p>(8 黒川久美)</p> <p>近年、保育現場で「気になる子ども」が増えている。抱かれると身体を硬直させ、あたかも人と触れ合うことを拒むかのような乳児、自分の感情や行動をコントロールできず、二歳児のように「だだこね」する四歳児、集中力や落ち着きのない子どもなど「気になる子ども」の姿は多様である。こうした子どもをどう捉え、どう向き合うかは子育て・保育の今日的な最重要課題の一つとなっている。そこでこのゼミでは「気になる子ども」問題をテーマに、まず先行研究や実践記録など文献研究を通して、問題への切り口を学生自身が発見し、そこからアンケートやインタビュー調査あるいは保育現場での観察などにより問題意識を掘り下げる課題探究の向上をはかり、卒業研究への準備となるようにする。</p> <p>(9 遠藤晃)</p> <p>自然を対象とするテーマ探求型の環境教育は、答えが1つに限らず、解決のプロセスも様々であるため、子ども達の「生きる力」を育む効果が期待される。このゼミでは、大学や地域周辺の自然環境、とくに野生生物を対象としたフィールドワークを体験し、環境教育の指導に必要な調査・研究手法の習得を図る。また、データ解析、文献の引用法、まとめ、プレゼンテーションの方法についても確認するといった課題探究能力の向上をはかり、卒業研究への準備となるようにする。</p>
--------	-------	-------------	--

<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">専門教育科目</p>	<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">ゼミナール</p>	<p>子ども教育専門ゼミ I</p> <p>(① 宮内孝)</p> <p>子どもの健康に関する課題について、それぞれの学生がテーマを決め、それに見合った文献や資料を収集してまとめ、発表・討論を行う。これらを通して研究に関する手法を身につけるとともに、プレゼンテーション能力の向上やクリティカル思考の習得を目指していくなかで課題探究能力の向上をはかるとともに卒業研究の準備となるようにする。</p> <p>(11 若宮邦彦)</p> <p>子どもの成長や発達を援助していくためには、子ども自身を理解するのみではなく、家庭環境や地域社会について理解しておくことが重要となる。このゼミでは、現代の社会における子どもや家族が抱える問題や課題、児童福祉の様々な援助に関する文献を学生自身が収集し、内容を理解し、発表・討論を行う。これにより、学生自身が児童福祉の現状や課題についてより深く考えること、また児童福祉の研究方法について理解し、研究の実施・まとめ方・発表の方法について学ぶことにより課題探究能力を高め、卒業研究へつなげるように指導する。</p> <p>(12 春日由美)</p> <p>「子どものこころの健全な発達」や、不登校やいじめ、親子関係やその他の様々な「子どものこころに関する問題」の中で、学生自身が関心や問題意識を持つ事柄について、学生自身が文献を集め、内容を理解し、他者に伝えるようにまとめたものを発表し、それについて全員で討論を行う。これにより、研究を行うことの意義を理解し、研究を行う過程について学び、またより他者に伝える発表について考えることを目的とする。そして互いに討論するという相互交流の中で、それぞれの学生がより深く問題について考え、理解することで探究力を高め卒業研究の準備となるようにする。</p> <p>(13 西村純子)</p> <p>実習やボランティア活動を通し、実際の現場で発見した自分なりの問題と照らして、「入門ゼミ」「プレゼミ」で提案した音楽指導と表現法の内容を再検討する。より具体的な情報収集と音楽技能の向上を目指すとともに、新たな観点や異なる分野からの視点を導入して実行力のある方法論を導き出すことを目的とする。一人一人が自分なりに改善した模擬指導、模擬授業を行い、ゼミ構成員の討議を通じて新たな課題を発見し改善しながら、音楽指導と表現の可能性を追及していくことを通して課題探究能力を高め、卒業研究への準備となるようにする。</p> <p>(14 磯部美良)</p> <p>子どもの社会性の発達にかかわる問題を中心に、学生自身の経験やボランティア活動、実習から生じた興味・関心に沿って、前期では共通のテキストを選択し、輪読する。そのなかで、文献の読み方や内容の整理のしかた、プレゼンテーションの方法について確認していく。後期は、学生が自らの問題意識に基づいて文献を収集し、報告発表を行う。以上のような先行研究の講読を通じて、子どもの社会性の発達やそこで生じる問題に対する理解を深めるとともに、研究の計画、実施、まとめ、発表に至るまでの科学的な研究方法を育成するとともに卒業研究への意識を高める。</p> <p>(15 國枝裕子)</p> <p>子どもの教育にまつわる現代的な問題を考える基礎を培うため、まず前期では教育学の基本文献を輪読する。後期は、その中からとくに日本の近代教育の歴史的な資料を素材として課題を設定し、個々の教育事象の特質や、その社会的影響力、現代教育への示唆などについて考察を深めていく。またこれらを通し、諸資料の活用法と情報の整理法、文献の読み込み方、文献内容の整理方法（レジュメの作成）、報告の仕方（プレゼンテーションの実施）などの研究の基盤となる探究力の向上をはかるとともに卒業研究へとつなげるように指導する。</p>
---	--	--

専門 教育 科目	ゼミ ナール	子ども教育専門ゼミⅡ	<p>(共通に扱う内容)</p> <p>4年次に通年開講する。専門分野についての学習を深め、卒業論文に関連するテーマを選び、論文や制作の作成につなげてゆく。3年生はこのゼミに参加できるが単位にはならない。なお、3年生は専門的関心の変化等の理由により4年次の指導教員を変更することができる。(*)従って、ゼミの内容は年毎に違ってくる可能性があり、ここではその一つの事例を述べている場合もある。</p> <p>(1 黒木哲徳)</p> <p>卒業研究が十分に達成できるように外国の文献を用いての講読を行う。例えば、日本の子どもたちと外国の子どもたちの算数・数学の学びについての違いについて調べ、発表し、討論する。算数(外国では数学)の概念は同じなのに、日本と外国での違いはなぜ起きるのかについて検討し、日本の子どもの学びを観察し、違いが起きるポイントを見つけて、それをレポートとしてまとめ、発表する。その年毎の違いに対応して、外国文献は異なる。</p> <p>(2 神田嘉延)</p> <p>卒業研究に向けて、各自の興味を深めるために、基礎的文献を読み、それを報告する形で関連する専門的な知識を深める。また、各自の問題意識を、子どもたちの育ちと関連づけて検討していく。保育・教育を担う者として、これらの問題についての知見を深め、卒業研究につなげていく。</p> <p>(3 赤松國吉)</p> <p>子ども教育専門ゼミⅠで深めた課題意識に基づいて、卒業研究との関わりで行う。また、教員の専門性として欠かすことのできない、分かりやすく指導する能力を磨くために、子どもが主体的に探究的に学ぶことができる教科指導について社会科教育を中心に考えていく。</p> <p>(4 矢口裕康)</p> <p>子ども教育プレゼミⅠでの研究主題に基づいて、卒業研究を進めていく。その際、保育・教育現場における調査研究を、卒業論文へと反映させる。また学生自身の保育者としての自立を実現するために、他の学生の興味・関心にも耳を傾けた、まとめ・発表・討論を行う。これらの過程で、研究主題を学生自らが形にしてゆく指導を行う。</p> <p>(5 島井哲志)</p> <p>卒業研究に関連する基礎的な文献を、各自が紹介する形で、専門的知識を深めることをめざす。論文を輪読することで、新しい知識を得、研究の背景を理解するだけではなく、研究論文を作成するために必要な論文の形式や、データ処理など統計的手法も合わせて習得することをめざす。</p> <p>(6 古賀隆一)</p> <p>造型における加工技術は、子どもの造形に対する夢を具現化するという目的があり、このゼミでは、この目的を実現するために、造形表現の指導力を高めることをめざす。また、子どもの制作意欲を喚起する重要な観点として、教室の室内装飾のレイアウトや色彩効果についても学び、卒業研究につなげていく。</p> <p>(7 澁澤透)</p> <p>本ゼミでは、教育学について専門的に学習研究していくためのベースとなる概念や理論枠組みを身につけることをねらいとする。具体的には、戦後教育学における発達と教育に関する代表的な理論(文献)を取り上げて報告しあうことで卒業論文へ反映させる。</p> <p>(8 遠藤晃)</p> <p>子ども教育専門ゼミⅠで習得したフィールドワークによる調査・研究手法をもとにして4年次に取り組む卒業研究において、必要となるテーマに関する基礎的文献を各自紹介する。論文から専門知識を深めるとともに、論文の構成、統計的手法についても習得することを旨とする。</p> <p>(9 黒川久美)</p> <p>子ども教育専門ゼミⅠで取り上げた問題や学生自身の保育実習や子育て支援ボランティア経験などから生じた興味・関心に基づいて、卒業研究のテーマを絞り、それに関する基礎的な文献を収集したものを各自が紹介する形で、専門的知識を深めていくとともに、研究方法についても習得することを旨とする。</p>
----------------	-----------	------------	---

<p style="text-align: center;">専門教育科目</p>	<p style="text-align: center;">ゼミナール</p>	<p>子ども教育専門ゼミⅡ</p> <p>(① 宮内孝)</p> <p>これまでの大学での健康や体育に関する学びや実習等を通しての学びで興味を持った内容を卒業研究につなげるように指導し、子ども教育プレゼミや子ども教育専門ゼミⅠで養った探究の方法を用いてそれらの興味を深めていく。</p> <p>(11 若宮邦彦)</p> <p>このゼミでは、子ども教育専門ゼミⅠで深めた問題意識や、保育実習やボランティアといった子どもに関わった体験からの問題意識を元に、児童の福祉に関わる、各自が研究したいテーマに関する文献を収集し、卒業研究のためのレポートを発表し、討論を行い、卒業研究で必要なことごとについて専門的知識を深め、論文の書き方や、研究方法について学ぶ。</p> <p>(12 春日由美)</p> <p>授業は、各学生が自分の卒業研究として取り上げたい「子どものこころの健全な発達」や「子どものこころの問題」に関わるテーマを設定し、それに関する論文を収集し、内容をまとめ、発表する形式とする。卒業研究を行うために必要な方法についても習得することを目標とする。また互いに発表し、意見を出し合うことで、より自分が取り上げたいテーマについて理解を深めることを目標とする。</p> <p>(13 西村純子)</p> <p>このゼミでは三つのことを目標とする。まず、各自の目標とする卒業後の進路に合わせて、保育所保育指針、幼稚園教育要領、音楽科学習指導要領の理解を一層深めること。そして、それに基づいた音楽指導や授業の目標と内容の設定、指導案の作成、授業展開の方法について実践的考察を行うこと。最後に、その専門的知識と音楽技術に基づき、これまでのゼミや実習で得た問題意識について卒業研究を進めることである。</p> <p>(14 磯部美良)</p> <p>子どもの社会性の発達にかかわる問題を中心に、子ども教育専門ゼミⅠで深めた問題意識に基づいて、卒業研究を進めていく。前期は、自らの研究課題を設定することを目的として、先行研究を収集、まとめ、報告する。心理学研究法に基づいてアンケート調査等を行う場合には、その計画を早めに作成し、調査実施の準備（アンケート用紙の作成、調査依頼等）を行う。後期は、各自、卒業研究の進行状況を報告し、指導を受けながら、卒業研究をまとめていくためのものとする。</p> <p>(15 國枝裕子)</p> <p>子ども教育専門ゼミⅠを踏まえ、各自が卒業研究として深めていきたいテーマをしぼって、関連する先行研究や資料の収集を行い、それをまとめ発表することを中心内容として進める。テーマに関しては、とくに子どもの教育に関する歴史的資料を素材にして今日的な観点から考察していくものとする。ゼミⅠで習得したような研究の基盤となる力をさらに向上させていくのはもちろんのこと、レポート作成やグループディスカッションを通して、論理的思考力を高め、専門的知識を深めていく。</p>	
	<p style="text-align: center;">卒業研究</p>	<p>大学教育の総まとめとして、学生は専門の学問分野に応じた研究課題を設定し、卒業論文や卒業制作（作品）としてまとめていく。指導教員は、各学生の問題関心を学問的な問題意識へと発展させていくよう指導するとともに、文献や資料の紹介、解読の仕方、論文の書き方など技術的な面も指導しながら卒業研究の完成へと導いていく。</p>	